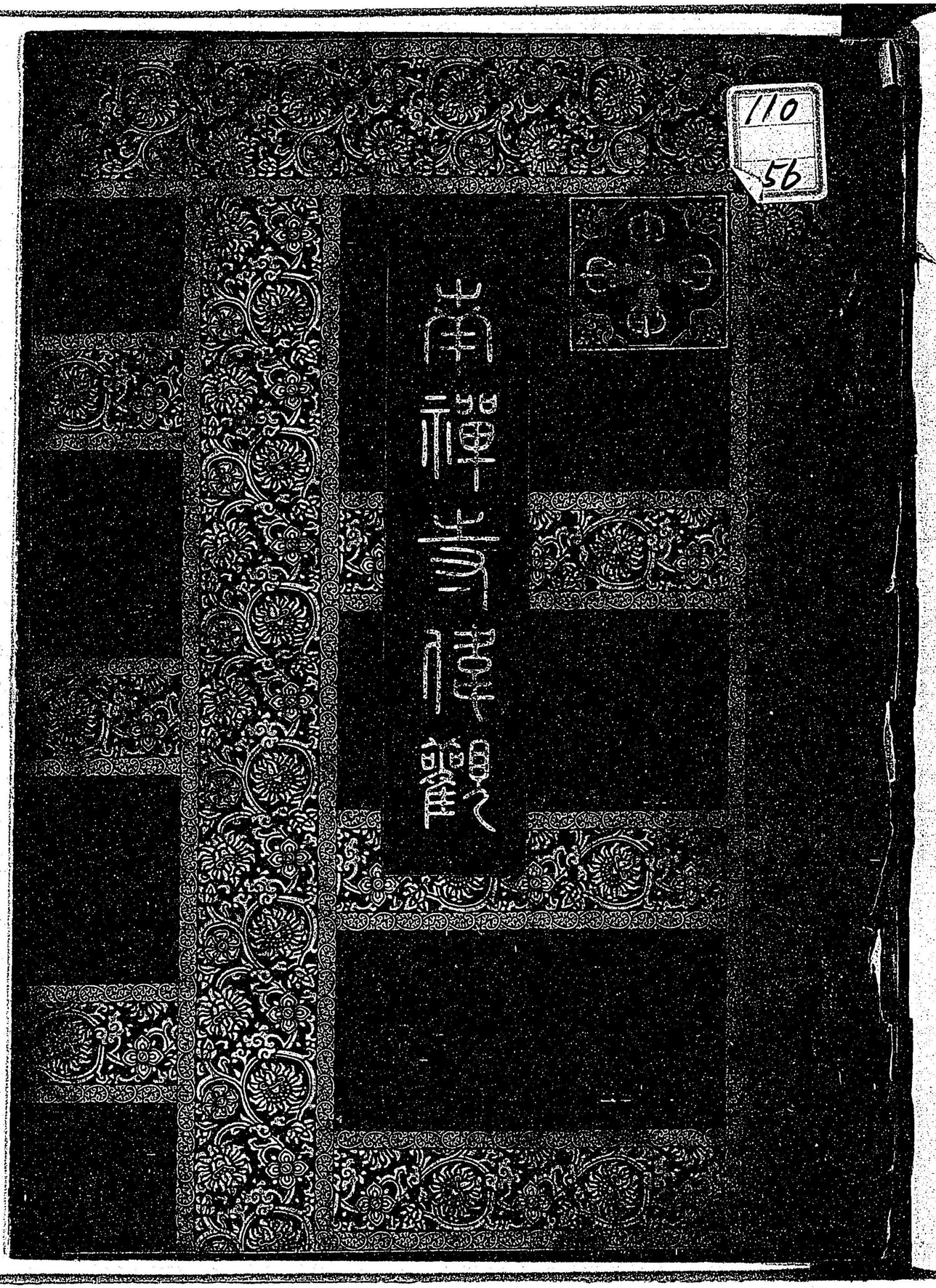


110
56

019775－000－3

110－56

南禅寺偉観

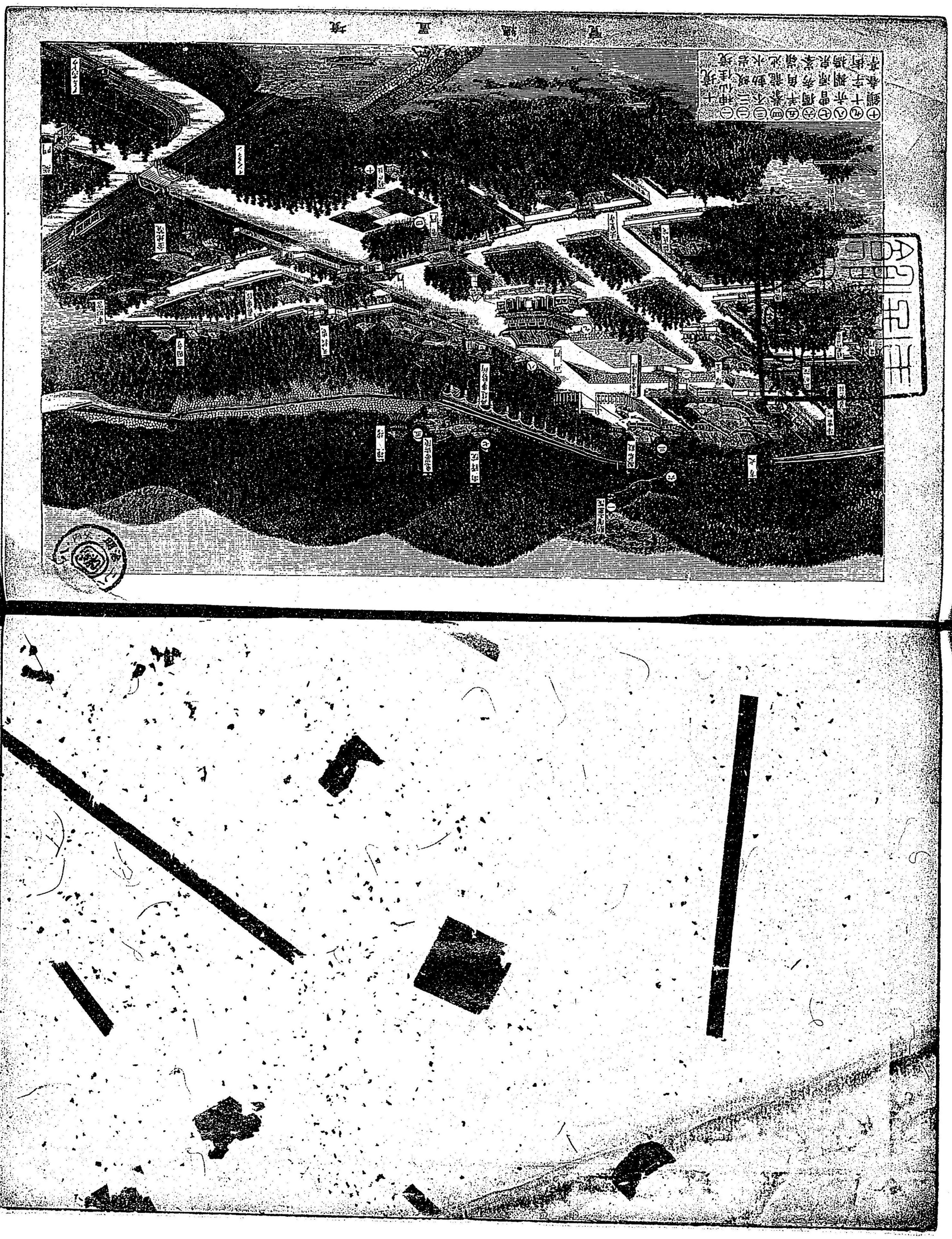
畑道温／編

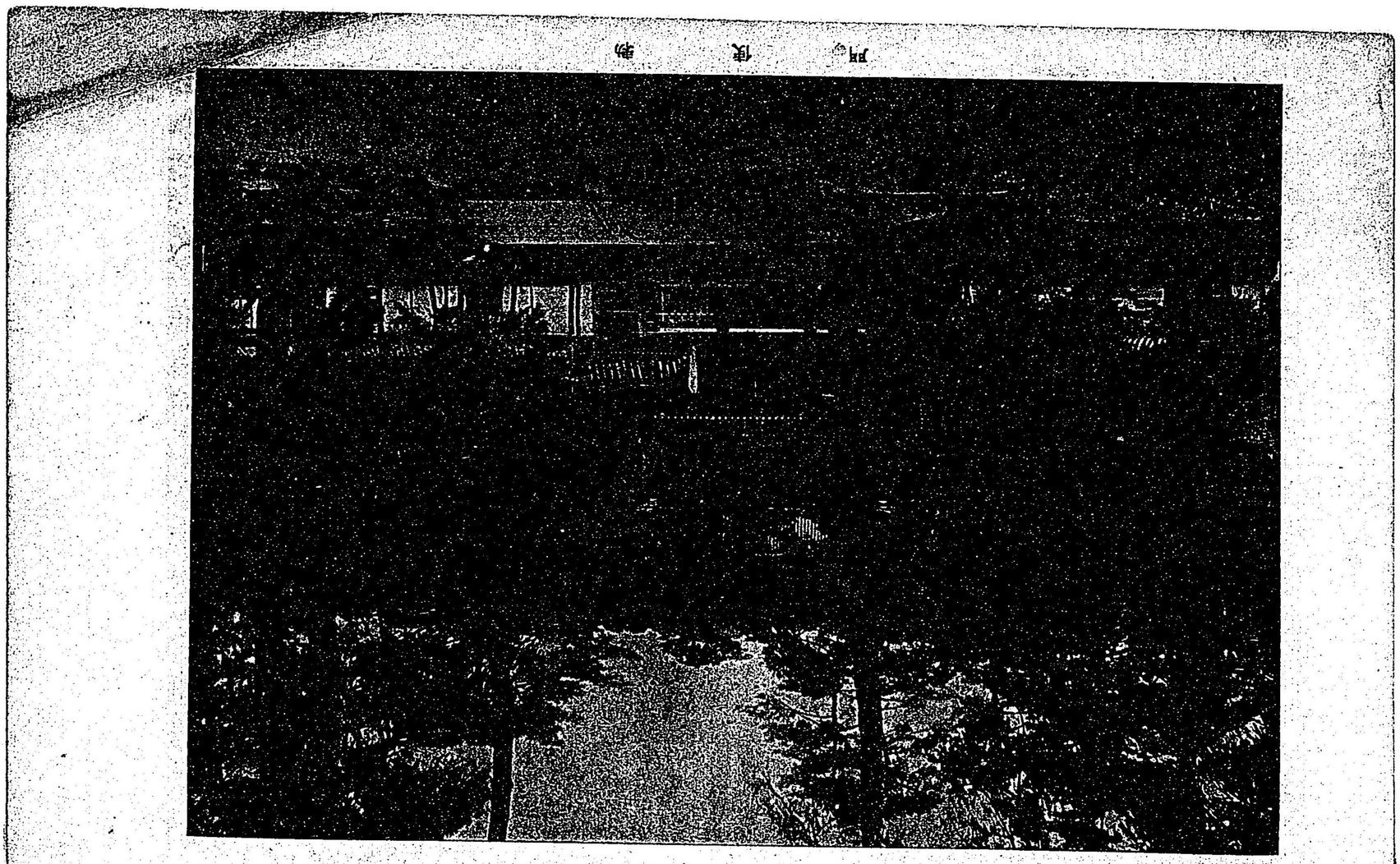
M28. 10

ABG－0588

110
56

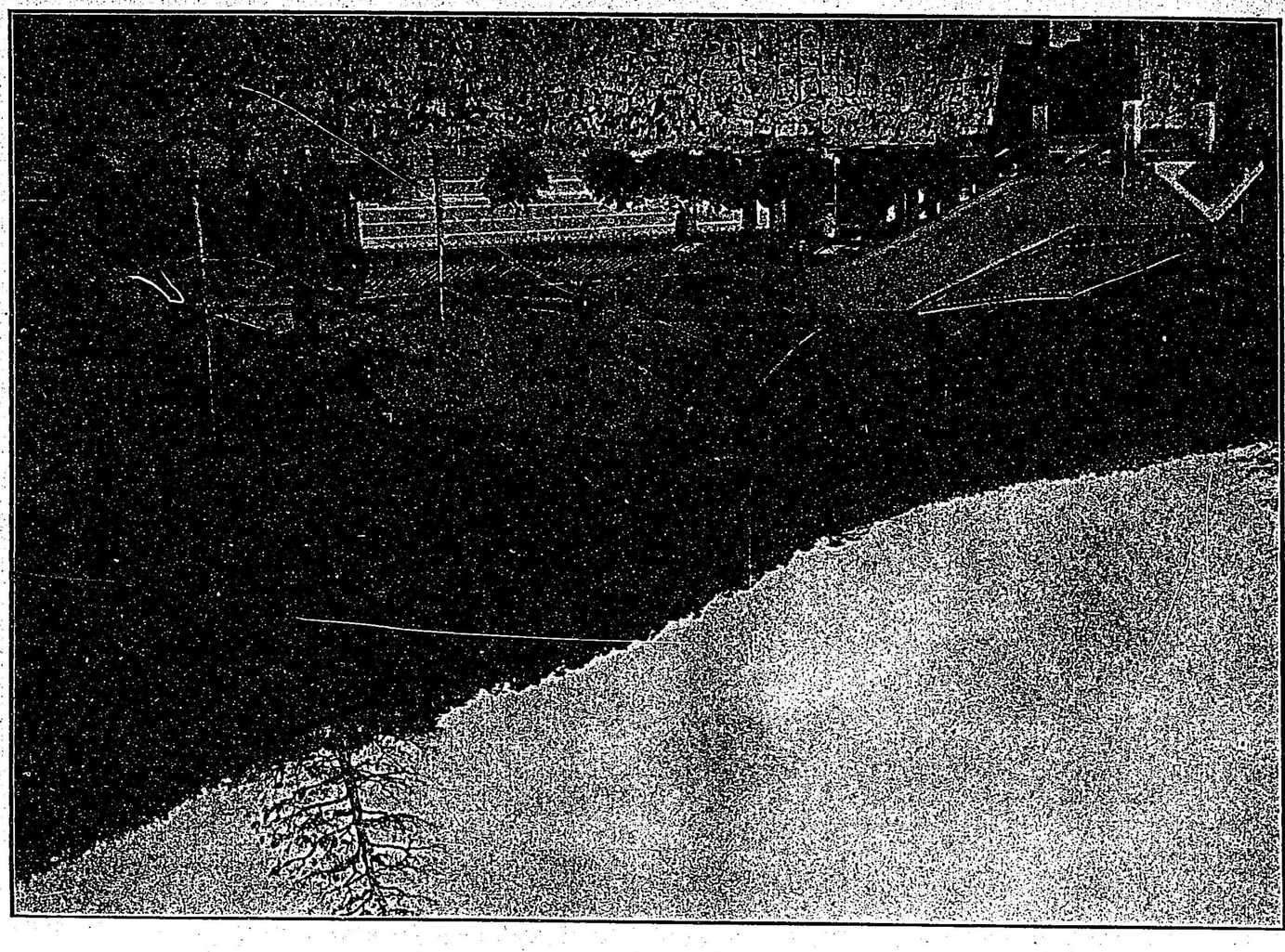
禪宗律觀


寛政補置焼
(十)鎖十亦曾痴半柔不二(一)神十
春宇調席秀角龍動蚊(土)境
亦折捲泉業硝水号境

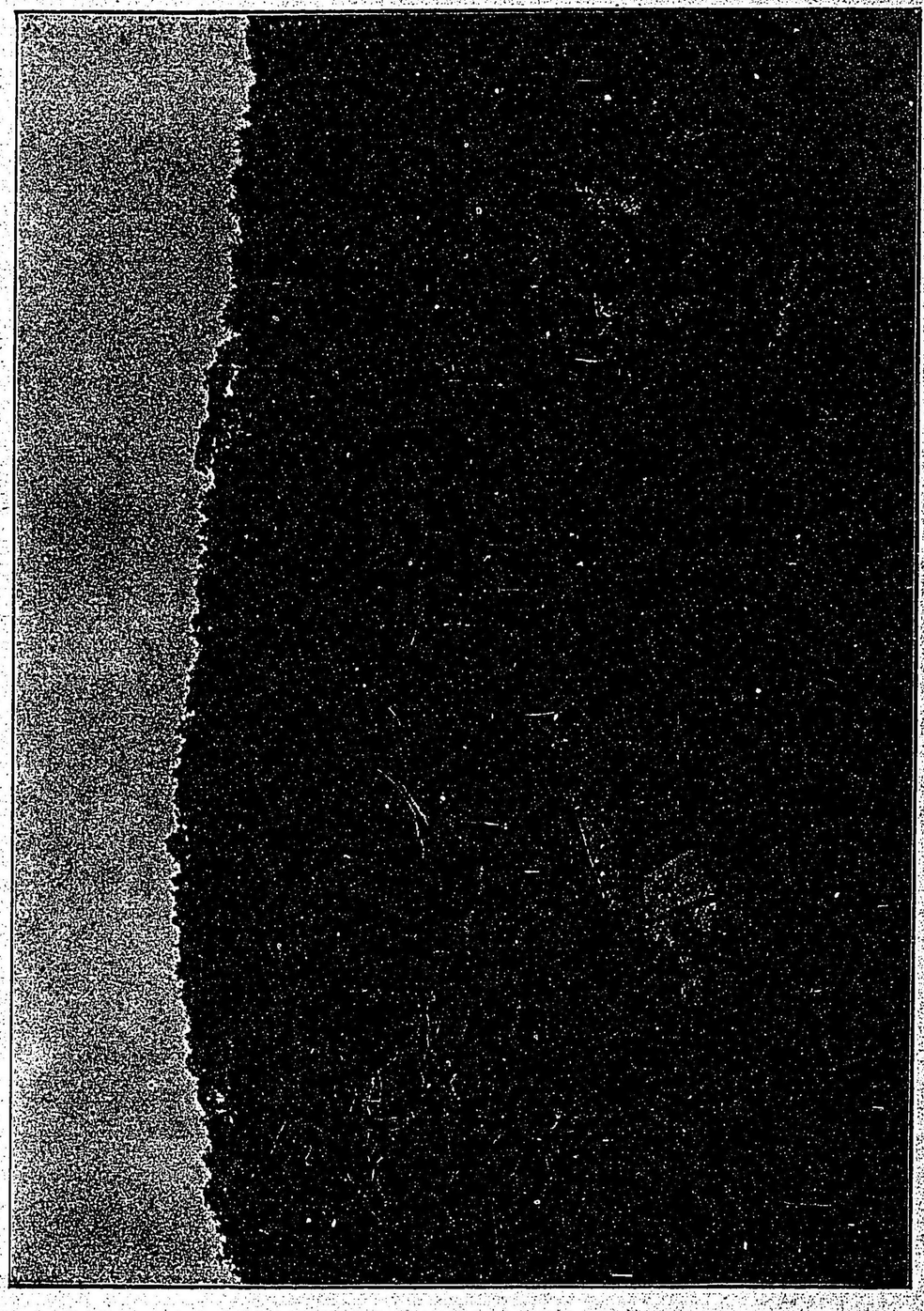


山　　明

小川一眞寫眞影刻銅版及印刷



龜山天皇御願殿



凡例

一本書は當南禪寺か恐れ多くも皇室に對し如何なる關係を有する乎國家に對し如何なる功德を持つ乎一讀上昭々たらんことを欲し更に文飾を施さす直言以て事實に徵し繁を省き要を採る故に宸翰綸旨及ひ古書類の如きは揭徵其十中の一に過きす覽者之を諒せよ

一宸翰綸旨及古書類の多くは皆時代の渋文體にして甚た讀み易すからす今は文義の徧通を欲し宸翰の神聖古文書の優調を汚すをも憚らす施すに訓點を以てす編者の管見固より誤りなきを保し難し識者之を訂せよ

一當山は五山最頂の綸旨ありし已來吾宗出世の道場たるを以て五山の碩德皆な是に住す故に傳燈所載の高僧最も多し其逸事の如きも亦徵からすと雖とも今繁を厭ひ唯た宸翰及ひ古文書に因みある者二三の畧傳を徵するのみ乞ふ之を以て家珍を盡すものとすることなかれ

編者識

南禪寺偉觀目錄

開創緣起　壹丁上
寺門格式　自壹丁下至貳丁上
結構沿革　自貳丁下至七丁上
宸翰及古文書　自七丁下至十六丁上
御陵及墳墓　自十六丁上至十八丁上
當山所藏寶物　自十八丁下至貳拾七丁

南禪寺偉觀

勅號五山之上瑞龍山太平興國南禪寺

開創緣起

當山の開創は今を距る前六百有餘年に在り謹て案するに弘安中　龜山天皇此地の山林靈秀水石鮮明を愛し離宮を經營し給ふ巍々たる金殿は山水に映照し峨々たる玉樓は木石を光奇す實に皇都隨一の壯觀たり正應の始め山怪妖異の事あり天皇我朝開山國師〔諱は普門無關と號す後佛心禪師又大明國師と賜謚〕を召し鎭壓の事を問はせ給ふ國師奏對して曰く妖は德に勝たず祢子此に居らは何の怪かあらん　天皇侍御を顧みて曰く師は眞に烈丈夫なりと師に勅して宮を鎭せしむ師禪侶を率ゐ唯た宮中に趺坐するのみ復た餘行あることなし而して怪異頓に息む叡感最も深く　天皇之より宸襟を禪宗に傾けさせ萬乘の尊を以て遂に師弟の禮を執り專ら禪定を修し革めて離宮を禪刹と爲し國師に勅して開山第一祖となす祖圓〔圓は開山の上足後ち南院國師と謚す〕を第二世とす二世勅を奉して大佛殿及び諸堂を創建す　天皇親ら錦囊を以て土砂に代へ二世をして其

の肩を差せしむ後三年にして工事大成す更に標して金剛王寶殿と云ふ其梁牌の銘を天下南禪記〔記は應永二十年僧有諸の撰する所〕に揭て曰く　伏願　玉葉重芳　鞏邦基於盤石之固　金輪統御　延皇祚於箕翼之長　次冀　干戈永罷　國家安寧　五穀豐登　萬民樂業　永仁元年大歲癸巳十一月日　開山檀那　金剛眼謹立〔金剛眼は龜山天皇の御法號〕是に於て朱楹彩欄の中始て一大梵宮巍然として聳ゆるに至る永仁七年三月日　天皇親ら御起願文を宸製し之れを當山に納め皇室の尊榮と共に當山の洪基を鞏固ならしめ給ふ是れ當山の濫觴なり

寺門格式

當山は　龜山天皇御勅創已來歷朝の勅願所にして其寺格の如きは古今一轍敢て異變あることなし御起願文に所謂當山の繁昌は蘿圖永く固く玉葉久く茂からんと若し朕が思ふ所に背かは廢亡踵を旋らさんと是れ當山盛衰の係る所重且つ大なり豈當山の繁盛を欽せさる可けんや故に　後醍醐天皇の建武二年四月廿二日五山最頂の官符を下し給ふが如き　後小松天皇の至德三年七月十日左大臣足利義滿に勅して五山之上の綸旨を賜ふが如き吾南禪寺の榮譽も亦極まれりと謂ふへし　龜山天皇遠江國初倉莊加賀國小坂莊筑前國宗像莊は盡未來際寄附して天地と共に改易あるへからすと所謂山礪河帶の證文は　御聖孫の御炳鑑にして　後宇多天皇並に　後醍醐天皇に至り六萬石の增祿を寄附せられたり武門權を執るに當て頗る變更あり豐臣氏寺祿を定む其祿往古の如くならすと雖とも一山の食邑は弐千石の夥しきに及ひ以て明治維新に至る明治十年二月宮內省より格別の御思召を以て金七百圓下賜同十八年六月內務省より金五百圓下賜又同廿七年八月內務省より修繕費として金四百圓下賜せらる祿位既に斯の如し住持其當を得さるを得す之を以て御起願文に長老職の事を御欽定あらせられ器量卓拔才智兼全而かも佛法を重擔と爲し勤行を志節と爲すの仁を選ひ補任すへき者なり吾子孫と雖も勢を以て住持すへからすと斯の如き御箴誨あるか故に古來邦人異域の別なく一時の碩德を選ひ勅命住持せしめ特例朝賀の式典は延て明治維新の際に至り嘗て異變なく第一世大明國師より現住に至り實に三百三十世法燈連綿として臨濟宗の最上位大本山の資格を以て吾一派五百の末寺と三百の所轄寺院と十萬の檀信徒を領し今尙巍然として法幢を建つる者　歷朝在天の靈之を擁護し給

ふ所なりと雖も今上皇帝允文の恩澤と有力大臣篤信檀越の外護なくは何を以てか今日あることを得ん

結構沿革

諸伽藍は初め　龜山天皇の離宮を賜ひしを以て其建築は宮殿樣にして未た梵制に非す上宮〔今の　龜山天皇御陵幷尊像奉安所南禪院の地之れなり〕を吾開山に賜ひしなり當時の舊圖今とせられ下宮〔今本坊の所在地之れなり〕を御在所尙ほ存す蓋し已に梵制となりし後　天皇御臨幸ありし時の者なるへし第二世祖圓の時に及て勅建の七堂伽藍一齊全備儼然たる巨刹となれり時に教宗の僧徒禪家の隆盛南禪の勃興を嫉み事に托し爭端を開き朝廷に抗訴し遂に兵を擁して當山を火するに及へり當に北朝明德四年なり爾後當山第百九十一世一華の代　皇室將家有力檀越の寄附を以て再興せしか應仁元年九月十八日東岩倉山の役山名宗全の兵の爲め燒れ諸堂伽藍を始め子院六十二個院も悉く焦土に歸す舊記寺寶の散亡擧て記すへからす一時住持僧侶皆四方に奔竄せり足利氏の中世再興を謀る者あるに似たり卽ち當山所藏の古文書中南禪寺再建材木海陸關所無稅通過せしむへきの令書數通現存す其年代は康曆文安享德に渡れり蓋し當時群雄割據四海寧日なく大厦の復舊容易の業に非す延て豐臣氏より德川氏に至り皇室將家鉅萬の資財を投して再建し諸堂伽藍始て　天皇勅創の故に復すと雖も子院は大に其數を減し僅に二十八個寺を復するのみ是れ皆諸侯の再建に係り甚た壯觀たり明治維新後廢祿に因て頓に維持其方を失し現存僅十餘個寺に過きす寺觀自ら古の如くならすと雖も現に當山の伽藍に屬する者八十八棟にして其平面總坪九百五十餘坪子院に屬する者百零三棟にして其坪は九百十餘坪の多きに及ふ豈に帝國の偉觀たらすや是れ當山古今沿革の大要なり今や南禪偉觀を編纂するに當り其の規模如何に廣大にして風光如何に秀麗なる乎を一瞥の中に昭々たらんことを欲し初めに當山の全境を揭け次に伽藍中最も風致に富む者を拔き寫眞彫刻版となし附するに說明を以てす又堂宇及ひ子院にして其由緒確實なる者の略歷を添へ大方の昭鑑を資し以て千聞一見に若かさるの感あらしめん

其一　境置總覽

當山の位置たるや獨秀峰羊角嶺高く東背に聳ひ自ら障壁をなし南に粟田山將軍

塚北に小野を隔て〻黒谷眞如堂の林巒起伏し其狀兩翼をなし前に一帶の青松數丁の大道を擁し當山に詣する者敢て道を問ふの煩ひなし其封疆は往古頗る廣大なる者の如し案するに當山六世夢窓國師尊良親王の御首を當山の北疆に葬りしと云ふ今は禪林寺街道の南邊に在るを以て其廣域たるを證すへし卽ち應仁の亂に罹り爲めに寺宇荒廢多く年所を經天正慶長に至り漸く復舊の隆運に向ひ其兆域卅八丁餘を領し以て德川氏の治政を經過し明治維新に至り全く上知處斷せらるゝと雖とも其十一丁餘歩は現境內にして古來有名なる當寺の十勝境〔圖中其名を列擧す〕も現に其風致を持ち老松或は天を衝き或は地に蟠り蓊鬱として自ら神仙境をなす今や遽らすに疏水運河を以てし左溪の水路閣前丘の陸舟道は人工以て天工の明媚に映し恰も錦上に花を添ゆるの奇觀たり

其二勅使門　梁行二間桁行三間

寛永十八年　明正天皇日華門を賜ふ木質は總槻材飾るに彫刻を以てす鎖春橋を渡り天下龍門に登るの路に設けたる要關にして常に之を鎖す古來勅使の來臨及ひ住職入寺退山の式典に非るよりは門扉を開かす兩傍の古松鬱密として蒼翠地に滴り神涼く骨冷かにして眞に神仙境に入るの感あり

其三山門　梁行五間四尺桁行十一間半

其門を天下龍門と號し其樓を五鳳樓と云ふ初め　龜山天皇の勅建應仁の兵燹に罹り天文中再建を計りて成らず寛永五年藤堂高虎之を再興し其樓上は總極彩色にして畫工狩野采女正守信繪所土佐法眼德悅の合成實に帝國第一の麗觀と云ふも敢て誇言に非るへし高虎其發願に曰く願くは當山山門の廢を興し一は　天皇の神靈を慰め奉り二には臣幼より軍に從ふ家士爲めに戰死する者勝て數ふ可からす就中慶長十九年大阪陣の如き忠戰致命する者七十一人皆寵士たり臣今官少將に至り位四品を踐む彼等の忠戰なくんは豈今日あることを得んや一將功成て萬骨枯る哀憐に堪へす因て亡士の冥福を營まんと卽ち山門を再建する所以なり故に樓上に藤堂家歷代の靈牌を始め大阪陣致命の名士藤堂仁右衞門藤堂新七郎藤堂玄番藤堂勘解由桑名彌次兵衞山岡主計等の六靈及ひ七十餘名の靈牌を安し今尙追薦怠らす

其四大方丈　梁行西七間東九間桁行十間半　小方丈梁行五間半桁行七間

大方丈は慶長十六年皇居御造營の時　後陽成天皇舊來の清涼殿を賜ひし者小方丈俗に虎の間と云ふ同年德川氏桃山御殿の一棟を寄附せられし者にして兩棟屈曲相連り屋裝輪奐構造美を盡す今其內裝の一班を展示せんに大方丈の西に位する者を西の間と云ふ金地彩色花鳥を畫く中央を御晝の間と云ふ金地彩色二十四孝を畫く上壇を鳴瀧の間と云ふ金地彩色床に瀑布襖に殿上美人を畫く皆狩野永德の筆又鶴の間に鶴、麝香の間に芙蓉に麝香、柳の間に柳を畫く何れも皆金地彩色にして狩野元信の筆佛間は狩野山樂の墨畫山水　小方丈の三間は竹林に虎豹群遊の圖を畫く皆金地彩色探幽齋狩野守信の筆斯くの如く大廈の戸障に至るまで充たすに四大畫伯の大手筆を以てす又庭園は小堀遠州の作にして名けて虎の子渡しと云ふ奇石磊々たる間點綴するに花卉を以てす別に奇巧を用ゐずと雖も自ら韻致ありて之れに應ず豈に麗觀たらずや之れか保全たる從來寺院の特色とする所なりと雖も又王族大臣有力の擁護なくんは焉ぞ三百有餘年後此美術を一堂に見ることを得んや

其五　龜山天皇御廟殿　梁行五間四尺桁行九間四尺

當山の別院なり初め　龜山天皇離宮を茲に營み之を上宮下宮に分ち上宮を以て仙居と定め下宮を改め梵宮となし給ふ別院は卽ち上宮の古跡なり　天皇崩御の後ち遺勅に依り此地に御分骨更に御法體の尊像を本殿に安し之を奉祭せり是れ亦應仁兵燹後久く荒廢せしか德川家綱公の母桂昌院之れを再建す今の方丈之れなり襖の畫は狩野常信の筆なり林泉は當山中に冠たり池を曹溪と號す池中島あり心字島と云ふ天然の巖石自ら心字をなす仍て之れに名くと池畔遶らすに數百年の老樹を以てす幽邃掬すへし是れ　天皇御宸愛の遺製今猶當時の髣髴を存せり斯る由緒の故に他と同しからす古來輪番住持の制を以て之を神聖にす

其六　鐘樓　梁行三間桁行三間總丈五丈餘

東、羊角嶺獨秀峰の翠微に踞し西、岡崎の喬林を隔て洛中を眼下に眺め今や樓下遶らすに疏水運河を以てす其水や淸冽其山や幽邃山水已に好し爰に雲際松樹の間壯閣を見る之れ當山の鐘樓にして文祿年間の構造其鐘銘は菅原道眞の製作明德癸酉の變惜むらくは破裂し其篆斷落せり元祿五年改鑄して更に舊銘を錄し後跋記するに菅原豐長の文を以てせり是れ當山勝景の第一なり

佛殿　梁行十三間桁行十一間

慶長十一年　後陽成天皇豐臣秀頼に勅して再建し特に曇華堂の奎額を下し賜ふ

奉行は片桐市之正且元片桐主膳正貞隆其構造は二重層屋にして木材は薩摩杉及ひ槻材より成る天非丸龍は狩野山雪の筆　本尊釋迦佛及ひ文殊普賢菩薩は運慶の名作なり（傳に曰く秀吉征韓の役幾多の生靈を殺戮す一大禪刹を建立し以て其靈を慰めんと欲して遂に果さす秀頼に至り勅許を蒙り始て父老の宿願を成就すと之れ韓地多く禪を宗旨となし殊に當山住持靈三は從軍僧の一人にして專ら文事を司り其功勞最も多し故に此の擧ありしと云ふ）斯る由緒の名藍も本年一月十二日の夜俄然烏有に歸す今其因緣を記し以て徒く惜みを俱にせんのみ

總門明き一丈　中門明き二間　裏門明き二間

此の三門は倶に慶長四年の再建にして總中二門は松井佐渡守の寄附裏門は芝山監物の寄附樫一本木の構造を以て其名を稱す

僧堂は當山の專門道場にして叢蔔林と號す初め永仁五年　龜山天皇の勅創に係り　天皇其側に小室を營み衆僧と同く禪定を修し給ひたる古跡なり今尚ほ茲に天皇の御尊影を奉安し以て　聖皇御垂範の洪摹を存す

景烈祠は本多佐渡守藤原正信の紀功碑の在る所にして慶安二年正信の姪本多豐前守正貫の建てし所なり正貫は本多正重の子正重は正信の弟なり正重死後家を繼く正信の家は正信の子正純元和八年配流せられ其家斷絶し德川佐命の元勳たる正信の不祀の鬼となり其事實も世に湮沒せんことを畏れ其姪正貫此祠碑を立て以て千載不朽を計りしなり祠は本堂の右に在りて南面し其中に楠版の大碑を立つ高さ一丈一尺二寸廣さ四尺六寸龜趺龍標豐隆なる巨碑なり其文は林道春の撰其書は石川丈山の筆にして當時の巨文大作なりと云ふ今其文を略す

大石燈籠は寛永五年九月十五日佐久間大膳亮平勝之の寄附なり高さ二丈二尺臺一丈一尺希世の巨燈なりとて世之を稱す

天授菴は開山大明國師の塔所なり第十五世虎關國師　光明天皇に奏請して創立す應仁の兵燹に罹り中頃甚た微々たり法孫雲岳は細川幽齋の室光壽院の俗姪なるを以て慶長七年幽齋祖庵其他を再建す林泉は幽齋の設計に成り清雅掬すへし」

歸雲院は當山第二世南院國師の塔所にして今再建の年代詳ならすと雖も蓋し應

仁の兵燹後第一に再興せしもの歟其構造の古樸なること當山中第一となす又庭
中岩下泉あり之れ　龜山天皇御愛味の靈泉なりと云ふ
聽松院は當山十四世澄清拙の住院にして應仁兵火の後當山第二百六十六世玄圃
靈三は豐臣秀吉の眷遇を受け院領百石を賜り寺門も亦再興し堂宇泉石舊時に倍
せり
金地院は當山六十八世大業は畠山基國の叔父なり足利義持の歸依を以て本院を
開き當山二百七十世本光國師以心崇傳中興す將軍德川家康の知遇を蒙り天下僧
錄司に任し寺社の事を掌り大に力を政事に用ゆ寺祿一千九百石の夥しきに至る
故に佛殿堂宇頗る壯麗を極む現在の客殿は伏見桃山御殿を拜領し棟一色の節な
し襖は總金張附畵は狩野探幽尙信雪信三大家の筆に成り洛中第一の美觀なり故
に昨明治二十七年中府知事を始め今泉京都美術學校長及市參事會員の斡旋を以
て大に修理を加へ尙ほ進て永續資を積立て今や殆と二千圓の夥しきに及ふ之れ
以て其美觀たることを知るへし又本院に有名なる小堀遠州の好に成る八窓の茶
室あり林泉も亦小堀遠州の作にして鶴龜の庭と云ふ其規模の廣大にして且つ奇
石名花遠として致さゝるなく那智の奇石浪華の蘆各國の萃を集め內外相應の勝
想ふへきなり
安國堂は東照宮德川家康の靈を祀る家康法號安國殿と云ふ元和二年四月家康病
篤し其二日に至り當院の本光國師傳長老南光坊天海本多正純を召し遺命して當
院に祠堂を造營せしむ之れ洛外四鎭の將軍塚に擬し帝都守護の深慮を以てなり
と其薨去の後此に堂宇を營み其祀を起せり其結構は駿河久能山の殿社に髣髴た
り傳へ聞く其眞體は家康常時身を離さす携帶せし所の守袋にして其中に是の一
字を書したる一小片を納め更に之を小銅器に入れたる者と云ふ傳に曰家康初め
一夜掌中是の字を握ると夢む朝にして人に語る人曰く公天下を取るの兆なり是
の字を拆けは卽ち日の下の人なり日下人は是天下の人なり公今之を握る天下を
取るに非すして何そや家康大に悅ひ是の字を書し之を守袋に入れ日夜身を離さ
す卒に其志を遂くるに至れりと茲に祭る所の者は卽ち此の物なり

宸翰及古文書

龜山天皇御起願文

謹て案するに　龜山天皇巳に離宮を以て禪刹と爲し之を禪林寺と號し〔天皇本
と禪林寺殿と號し給ひ宮を革めて寺と爲すに及て龍安山禪林寺とし後改めて瑞
龍山南禪寺と爲し玉ふ事は天下南禪記及ひ南院國師語錄に見ゆ〕普門無關〔即
ち開山大明國師也〕を以て第一世となし玉ふ是に於て御起願文を宸書し之を當
山に納め永く以て後世に傳へしめらる　天皇は當時の英主にして嘗て王室の式
微鎌倉の跋扈を憂慨せられ　後鳥羽上皇の遺志を繼き北條を討滅し王室を興復
せんとの御志ありしも時運之れを如何ともすへからす遂に早く寶位を讓り〔即
位より僅に十二年此時御年僅に廿七歲なり〕禪を修し給へり當山開山の時は
伏見天皇永仁元年にして此御起願文は　天皇五十一歲の時なり此の御宸翰は全
紙二枚を繼き横披き卷物とす其下半以下恐れ多くも燒けて存せさる所あり相傳
ふ應仁の兵燹にて一山烏有と爲るの際火寶庫に及ふ寺僧某焔烟を冒して庫中に
入り重書を出し抱きて遂に出ること能はす衆皆謂ふ巳に焦土となれりと鎭火の
後物を抱きて爛死する者あり之を檢すれは其書全く燒失せす依て之を修理し以
て保存するを得たり今上下山形の線緯を現す者は之れ即ち燒損の痕跡なり

禪林禪寺起願事

朕聞古云。人身難逢佛法難聽吾被催十善之餘薰。
恭踐萬乘之帝祚。雖有亢龍之悔。猶待仙金之樂。竊
思何幸法逢大乘禪開南宗。處於後五百世之間。如
在三百餘會之砌。爰以建寺度僧。有漏善根雖非本
望。利生悲願化物要徑也。吾子子孫孫宜知吾所思。
當寺繁昌者。蘿圖永固。玉葉久茂。若背吾所思。廢亡
旋踵。若在天界以天眼照之。若在佛界以佛眼鑑之。
思之思之。

一寺領事

遠江國初倉莊

加賀國小阪莊

筑前國宗像莊

右件三箇所。盡未來際被寄附當寺畢。縱雖高岸成深谷。滄海變桑田。不可有改易者也。子孫宜守吾本志。願雖有加增。不可減少者也。

一長老職事

選器量卓拔。才智兼全。而佛法爲重擔勤行爲志節之仁。可補任者也。佛日增輝。法輪常轉而已。僧者不必以貴人爲尊。乃至雖吾子孫不可以勢住持。恐爲傷風敗教之端。深囑深囑。

永仁七年三月五日　　佛子金剛眼御判

後柏原天皇御宸書　讃辭　龜山天皇御製　開山大明國師肖像

釋普門字無關信州保科の人姓は源母某富士山に登り日輪海を出るを見て孕て之を呑むと夢む覺て白光室を照すを見るに已に而娠むあり十二月を經て生る口雙齒を生し目に重瞳あり十二歳にして祝髮す或日忽ち歎て曰く大丈夫當に大方に翺翔すへし豈に一方に粘着すへけんや遂に錫を飛して宋に入り兩浙に遍遊すること十二年歸朝後藤原實經請て東福に主たらしむ居ること十餘歳正應中　龜山天皇龍山の離宮怪異あり　天皇當時の碩學を召し之を祓ふ驗なし或人門の德望を奏す乃ち召して之を問ふ門曰く妖は德に勝たず世書尚之れあり況や釋氏をや衲子之に居る何の怪か之れあらんと乃ち勅して之を祓らはしむ門其門人と宮に入り安居禪坐復た他事なし怪異頓に止む宮中晏然　天皇之を嘉みし遂に離宮を賜ひ禪刹となす即ち南禪寺是なり門に勅して開祖となす　天皇屢幸して禪理を問ひ一時の名流從て弟子と稱す此多病む病革なり　天皇親臨之を問ひ親ら墨を磨し毫を濡し遺偈を命せらる門欽て之を書す曰く　來無所住　去無所方　畢竟如何　喝　不離當所と筆を置き坦然化す實に正應四年十二月十二日なり明年　天皇御製の讃を賜ふ嘉元中佛心禪師と謚し元亨三年大明國師と加謚す　天皇御宸書の肖像は應仁の兵亂に燒失せしを以て文龜元年法孫某等　後柏原天皇に奏請

し更に大明國師の肖像に　先帝の御舊讃を寫し賜はる所なり其宸翰は左の如し

叢林老作人天眼　電卷星馳追也難
三尺竹筐三尺鐵　未曾動著逼人寒
自瀝宸翰以表
正應壬辰大呂佛成道日　比丘金剛眼
右龜山法皇勅讃依徒弟之請
染毫禿筆
文龜辛酉應鐘中澣

後陽成天皇御宸書　南院國師肖像讃辭廣照國師作

當山第二世釋の祖圓規菴と號す信州長池の人幼にして落髪稍長して佛光國師に參す或日北條時宗圓を見て曰く子他日必ず法寶を興さんと大明法燈兩國師に從事歳あり大明國師寂するに及ひ勅して當山の席を繼かしむ時に歳三十一　龜山天皇孜々參請禪理を擧論し屢詩偈を唱和す　天皇佛殿法堂山門を創建し給ふや　天皇躬ら錦嚢を以て土砧に代へ圓其肩を差す等當山伽藍の規模圓に至て大成す正和二年四月二日病を以て坐化す享年五十有三勅して南院國師と諡號を賜ふ國師の肖像舊物は慶長十七年國師の法孫梅心　後陽成天皇に奏請して更に舊讃を宸書し以て賜ふ所なり其宸書に曰く

帝王師表佛祖冤家滅常照之眞燈。
頓開正眼一裂佛心之教網別立生涯。
獨秀峯前湧出觀史宮殿。
歸雲洞裏化大澤龍蛇。
嚮仰莫能及讃歎無以加。
夫是之謂
南院國師規菴大和尚。
摧魔軍之壁壘增祖道之光華吁盛矣哉。
維時慶長十七歳舍壬子四月二日。

南院國師三百年諱之辰。

九代孫命之繪之乞謄寫之。

今以隱遁纖毫汙舊讚而已。

從神武百餘代孫太上天皇　花押

建武二年四月廿二日太政官符

當山第九世釋疎石夢窓と號す勢州の源姓　宇多天皇九世の裔孫なり九歳にして出家教を學ひて無碍辨を得禪に參して豁然大悟し德を愼み行を鑒し光を土州の五臺山に韜み跡を濃州の古溪甲州の惠林等に昧ませとも多年磨礪したる摩尼珠の光克く掩ふ可きに非す正中二年遂に　後醍醐天皇勅して當山に住せしむ夢窓奏して曰く臣僧志煙霞にあり出世を願はすと固く辭すれとも許されす當山に住すること前後兩回　後醍醐天皇以來七朝帝師の號を賜はり禪刹を創むること天龍を始め五十餘ヶ寺僧尼を度すること四千餘人弟子の禮を執る者一千有餘化道の盛なること古今其比を見さる所なり本官符は夢窓當山に住するの日、寺領の事

太政官符南禪寺

應停止國司守護使入部並官使檢非違使院宮諸司及神人甲乙人等亂入造諸社以下大小國役關東鎭西早打役當寺領遠江國初倉莊內江富鄉吉永鄉鮎川鄉藤守鄉同國新所鄉加賀國得橋鄉同鄉內佐野村佐羅村今村府南社神主職並得南益延長恒等參名同國笠間東保但馬國池寺莊播磨國矢野別名同國大鹽莊備中國三成鄉事

右得當寺住持沙門疎石去二月日奏狀稱當寺者龜山法皇草創皇居成佛閣勵叙志興祖宗締構既遒尋常尊崇亦無

に付奏上する所あり依て勅裁を經以て下し賜ふ官符なり案するに斯の時中興の餘賦役繁苛武人跋扈寺領安堵を得す夢窓之れを憂ひ其禁遏を請ひし者なり寺領は所謂國司不入の地にして一切賦稅の免地なりしを以てなり

等匹、仍被レ降二天澤廣大之宸翰一、永令レ備二寺領安全之龜鑑一、今
又賜二五山最頂之綸旨一、彌奉レ祈二萬歲康寧之洪基一者也、望請、
殊蒙二天恩一、當寺領悉任二勅願之叡志一、爲二三寶常住物一、盡未來
際無二改轉一、爲二寺家一圓之地一、永止二國衙之綺幷國司守護使
等入部一、應レ被レ停レ止、造諸社以下官使檢非違使院宮諸司國
使等之亂入、大小臨時之國役、關東鎭西上下早打役、吉備
津宮役、白山金釼宮以下諸寺諸社神人甲乙人等亂入狼
籍之旨、被レ成二下官符一、備二寺領安全之龜鏡一、全二寺用一、彌欲レ奉レ祈二
天長地久之御願一者、從二位行權中納言兼春宮權大夫
左衞門督大學頭藤原朝臣實世宣奉勅一、依請者、寺宜二承知一、
依レ宣行レ之、符到奉行
從四位上行左少辨藤原朝臣　花押
修理東大寺大佛長官正四位下行左大史小槻宿禰　花押
建武二年四月廿二日

後小松天皇御勅宣

當山第四十四世釋周信字義堂平姓土州長岡の人年十四にして剃髮魯詰竺墳泛覽して遺すことなし十七にして夢想國師に師事す後ち左大臣義滿公鈞帖を下して建仁寺に住せしむ至德三年春　後小松天皇の勅を奉して當山に榮轉す夏七月義滿公勅を奉して京兆鎌倉禪刹の位次を定む當山の位を陞して五山之上に居く卽ち斯の勅宣是れなり嘉慶二年春遘和に遘ふ乃ち命して龕を作らしむ四月二日自ら銘を製す侍者五鼓已に鳴るを告く端座示滅す實に其第四日なり

南禪寺座位之事
可レ爲二天下第一五山之上一之狀如レ件
至德三年七月十日　左大臣判
義堂和尙

後宇多法皇賜二寧一山宸翰

釋の一寧一山と號す姓は胡氏宋の台州人稟性端重氣宇神秀稍長して桑門を慕ひ初め天台を學ひ其支解を嫌ひ弃てゝ天童に至り後ち育王山に登り數師に歷事し學德益々高し元の世宗至元十八年水師日本に覆り其後通問久く絶ゆ大德四年吾商船明州に抵る元の成宗再ひ日本に通せんとす廷議寧を推す乃ち寧に金襴伽梨幷妙慈弘濟の徽號を賜ひ官使及僧錄司を差し敦諭せしむ寧止むを得す詔を奉し舶に搭し大宰府に至る時に正安二年なり〔蒙古の戰後二十年〕府を發し鎌倉に入る北條貞時疑ひ以て遊偵となし之を伊豆の修禪寺に置く寧晝夜修禪悠然道を樂む或人貞時に說て曰く寧公は彼の國の望士其來るや抑逼に出つ有道の士萬物に意なし豈に其遊偵ならんや之に依て鎌倉に致す正和癸巳南禪席を虛しくす後宇多上皇寧を迎へて住持せしむ　上皇荐りに山に入り道を問ひ給ふ眷待益々厚し寧老病を以て潛に越州に遁る　上皇屢宸翰を以て召さる本宸翰是れなり寧復南禪に歸住す文保元年宸翰を以て國師號を賜ふ同六年病を示す　上皇蹕を南禪に駐め親しく其病を問はせ給ふ九月廿四日手から遺表を書し以て其厚眷を謝し奉り又偈を書し筆を投し奄然逝く壽七十一　上皇表を得て匆忙寢堂に幸す跌坐儼然生の如し　皇情震悼震翰を染めて之を祭り勅して塔を　龜山天皇の廟側に起し奎額を賜ひ法雨と云ふ又省像の讚辭を賜ふ等數通の御宸翰中今其の一を揭くるのみ

親書特告南禪長老一山禪師朕聞師之道價久矣所以詔下關東以官差請來也一得會晤宛如獲司南之車也慕德欽風三閱青黃而聞有心退席而數々理行裝也去年親詣寶刹爲勾之也近者亦聽打拂行李書以慰諭公乃屈浦輪來諾許朕意不料暗裏出城遠涉山川矣若得回來再相見必許隨自便養病庵中追於懷璉之古風也何須更歸東關矣直饒燕居南禪東堂使小師等如元安着有何不可寧又有魔賊之擾乎大都公長化此方廣結四衆之緣則朕所願者也宜快歸來也千萬要面話不備。

五月六日

洞中隱叟書　洞中隱は後宇多法皇の御法號

後水尾天皇賜二本光國師之徽號一御宸翰

當山第二百七十世本光國師崇傳は足利氏の疏族にして丹波の領主式部少輔一色秀勝の子なり秀勝足利義輝に京都に仕へ足利氏亡ふ其一家又滅さる此時崇傳僅に十二歳なり其重臣平賀清兵衛奉して南禪寺に入り玄圃靈三に托し僧とならしめ其身は寺にあり常に之を保育せりと云ふ初め金地院に住し慶長十年三月南禪寺に轉住す德川家康深く崇傳を知り特に召して常に帷幄に侍し軍謀政策皆な參せさるはなし次に天下僧錄司に任し寺祿千九百石を賜ふ元和元年大阪亡ふ家康一代の制度を建んとし崇傳に命して其草案を立てしむ卽ち禁裏仙院公卿諸法度武家諸法度等是なり家康之を奉行し遂に德川氏一代の憲章となせり今に其手記草案を有す明年四月家康病篤し殊に崇傳及ひ本田正純を召し顧命を傳へ別に其祠堂を當山內に立てしむ德川秀忠江戸に移るに及ひ又命して金地院を江戸紅葉山に建てしむ崇傳既に德川氏二世の親任を受け天海と同しく樞機を參畫するを以て威權赫々公侯と雖とも殆んと其鼻息を伺ふに至る秀忠上洛の時扈從して左右に侍す秀忠屢々院門を扣き眷遇益々厚し寬永十年正月廿日寂す年六十五其辭世の偈に曰く六十五年閃電猶遲、末後一句子作麽生、萬機莫測、千眼難窺、金地東照宮の北に葬る墓堂を建て塑像を其上に安す崇傳遺命して寺領千九百石を辭せりと云金地院手記數十冊を傳ふ其日記慶長に起り寬永十年に至る日々其經畫關係あることを記載し細大洩さす巨細悉く擧く其書牘往復の如きは獨り自己の書案を記すのみならす其來書と雖とも概ね之を記せり軍國匆忙機務執掌の間に在りて其心を用ゆる至精至密想ふ可なり又異國日記あり外國に關する事蹟國書草案を記載せり本宸翰は　後水尾天皇其德を表賞し特に國師の號を賜ふ所の勅書なり

勅大覺叶二天下獨尊一玆開二西竺勝會一達磨現二濁末一優跋忽抽二東土一初支呈放光動地之祥一其超宗越格之眼一見住南禪以心大和尙法門領袖苦海楫航一崔南禪名藍一冠二冕諸宗一鼓吹一代一司二左街僧錄一統承二干載一光被二六幽一講說群書舌翻二波瀾一

開示萬法口盡江水朕特加圓照本光國師號以酬師範之恩更涉多辭卻汚其德者耶。

寛永三年十月八日

使節桂悟禪師與明國官司書

當山第二百四十一世桂悟禪師は永正六年足利義植の使命を奉し其徒を率ゐ國使と爲て明に入る明國之を待つに其禮至らさる者あり又其同行人の內僅に五十人京に入るを許し其他入京を許さす又其禮物受けの事舊例に同しからさる者あり桂悟正使の資格を以て書を彼の官司に與へ其事を辨し且つ其舊例に依らんことを請求せし者の如し足利氏の明國に於ける順逆道を誤る其事固より論するに足らすと雖とも桂悟八十三の高齡を以て絕海の强國に使し敢て文書を以て其禮を爭ひしは其氣慨稱するに堪へたる者あり此時明は武宗正德六年なり武宗桂悟の高德に感し勅して阿育王山に住せしめ賜ふに金襴袈裟を以てす道風大に行はる居ること二年歸るに及んで諸大家文詩を以て之を送り王陽明其序を作り推稱極めて至る其人と爲りを想見すへし明の官司に與へし文書は左の如し

日本國差來使臣桂悟謹呈悟等從人及商衆歷歲月浚風波遠來直欲拜帝闕之壯麗且得京城貨物也然今起身唯止五十人故悉相聚議皆有忿戾悟等取禍之端願垂憐容從使二百九十二人同日赴杭州則得慰衆人之喧嘩否則必致紛諍不虞之事悟等雖堅制之彼不肯聽之則補害不得也憐察惟幸。

正德六年九月　日正使　桂悟　副使　光堯　居座　光悅

士官　宗棟　通事　沈運

玄圃和尙大明朝鮮御朱印記錄

本書は南禪舊記畧に載する所なり本記は金地院第三世竺隱和尙の筆する所にして南禪創立以來凡そ事の重大要項に係るもの年代を逐ひ撮記せり國史上發明すへき事頗る多し本件は天正二十年當山第二百六十六世玄圃豐太閤に征韓の役に從ひ外國應接に關せし筆談及ひ文章の草案を記錄せし者なり玄圃は太閤の殊遇を受け當山を中興す其自記に大明朝鮮御朱印記錄なる者あり竺隱之れに依て抄出せしを知るへし依て其數通の中解し易き者一文を拔錄し以て史家の參考に資

す

大明勅使可レ告二報之條目一

一夫日本者神國也。神卽天帝。天帝卽神也。全無二差依一之國俗帶二神代風度一。崇二王法一體レ天則レ地。有レ言有レ令。雖レ然風移俗易。輕二朝命一。英雄爭レ權。群國分崩矣。予懷胎之初。慈母夢已輪入二胎中一。覺後驚愕。而召二相士一筮レ之。曰。天無二一日一。德輝彌綸。四海之嘉瑞也。故及二壯年一。夙夜憂レ世憂レ國。再欲レ復二聖明於神代一。遺威名於万代一。思レ之不レ止。纔歷二十有一年一。族滅兇徒姦黨。而攻レ城無レ不レ抜。圖レ邑無レ不レ取。〔舊記脫取字〕有二乖心者自消亡矣。已而國富家娛。民得二其處一。心之所レ欲無レ不レ遂。非二予力一。天之所レ授也。

一日本之賊船。年來入二大明國一。橫行于處々。雖レ成レ寇。予曾依有二日光照臨天下之先兆一。欲レ匡二正八極一。既而遠島邊陬。海路平穩。通貫無二障碍一。制二禁之一。大明亦非レ所レ希乎。何故不レ伸二謝詞一。蓋吾朝小國也。輕レ之侮之乎。以故將レ兵欲レ征二大明一。然朝鮮見レ機差遣三使。結二隣盟一乞レ憐。丁前軍渡海之時。不レ可レ塞二糧道一。遮二兵路之旨一。約レ之而歸矣。

一大明日本會同事。從二朝鮮一至二大明一啓達之三年內可レ及二報答一。約年之間者。可レ偃二干戈一旨諾レ之。年期已雖二相過一。無レ是非レ之告報。朝鮮之妄言也。其罪可レ逃乎。咎自レ己出。怨レ之所レ攻也。此故去歲春三月。到二朝鮮遣一前驅一。欲レ匡二遵約之旨一。於レ是設二備築城高壘防レ之矣。前驅以寡擊多。多刎二其首一。破散之群卒伏二林藪一。恃二蟷臂擧一螳戈一。雖レ窺二隙交一鋒。則潰散。追北數千人討レ之。國城亦一炬成二焦土一矣。

一大明國救二朝鮮急難一而失レ利。是亦朝鮮反間之故也。

一於二此時一。大明勅使兩人來二于日本名護屋一。而說二大明之綸言一。荅レ之以二七件一。見二于別幅一。

四人可レ演レ說レ之。可レ有二返章一之間者。相二追諸軍一。渡レ海可二遲速一者也。

文祿二年癸巳六月廿八日

石田治部少輔　增田右衞門尉

大谷刑部少輔　小西攝津守

御陵及墳墓

龜山天皇御分骨御陵

南禪院方丈曹源池の上にあり應仁兵燹後久しく廢墟元治元年十二月戸田大和守主幹となり西本願寺門主の寄附を以て小堂建築翌年八月廣橋大納言勅使として參拜御陵は古來當山の保管なりしか今は諸陵寮に屬す

謹て案するに嘉元三年九月十五日　龜山天皇龜山殿に崩す遺命に依り荼毘後御

骨を三分し淨金剛院高野山金剛峯寺と此に藏す是其所なり

後嵯峨帝皇后御陵

羊角嶺の下南禪院の上なる谷合にあり古來多寶塔と稱し當山の奉祭する所にして御法號を大宮仙院と稱す祥月は九月初九日なり近來諸寮寮に管す

謹案するに皇后は　龜山天皇の御母后たるを以て茲に奉葬せられたる者なるへし

尊良親王御首塚

當山の北禪林寺本道の南側田中に在り近年修造を加へ諸陵寮に管す

謹て案するに延元二年三月六日越前金崎城足利高經の爲に陷られ親王御自害あり新田義顯之に殉す足利高經義顯以下の首を取り之を京都に梟す親王の御首は別に之を夢窓國師に送る夢窓此時當山の住職たるを以て之を此に葬り其菩提を弔へりと云ふ事は親王本傳及ひ太平記等に詳なり

美濃忠仁公墓

墓は當山より永觀堂に趣く路の西に當り聽松院の北隣にして舊雲門菴の趾にあり兆域凡そ東西二間半南北三間繞らすに活垣を以てす南に偏し白河石を以て橢圓形の土阜を築く高さ凡そ二尺東西壹間半南北壹間許其中央に邦言カナメ壹本を植傍に凡そ六寸材大の方柱を建てり其頭を卒都婆形に作り其下に太政大臣の四字を刻す臣の字の下邊より缺折して見るへからす其存する者僅に三尺弱其左側に數梵字を刻し其下に文の一字あり文の字の下に字畫あれと字冠の殘畫あるのみ蓋し其折れ殘りは或は土中に埋まれし者なるへし其全體の構造及石碑の製作巳に荒頽す殘缺せし者尚ほ古式に合するを以て其の由緣あるを知る之れを古老に聞くに唯初代太政大臣の墓なりと傳ふのみ別に記する所なし蓋し公の累代の別業は後の法勝寺〔法勝寺の跡は凡四町餘にして南禪寺西北下岡崎の東南にあり公の墓と東西相望めり〕にして此地東邊に在り必す其近便の地に葬りし事知るへし又或は中古兵亂の餘一旦荒廢に付して大清和尚雲門菴を建るに及ひ其湮滅を惜み之を表せしにあらさるなきか田中教忠の說には其書風且五輪の製作康永明德年代の者にやと云へり雲門菴の創立は此年代にあるを以てすれは此說亦見所ある者の如し又古來此墓の祭掃は雲門菴代々之を保管し以て今日に至る嗚

呼公大職冠の正統閑院左大臣の嫡嗣を以て其女は　文徳天皇に配し　清和天皇の外祖たり其生や太政を綜理し萬機を攝行する事十五年位人臣を極め勳業世を掩ふ其薨するや國公に封し美諡を賜ひ藤氏の昌大實に此に基す今や星霜已に千有餘年時世の變遷幾回なるを知すと雖吾國貴族藤原其首たり公爵十家の中藤氏其六を占む而て皆公の裔に非るなし朝廷に於て其崇敬已に斯の如し豈空しく宿草野荊に委す可けんや微く其現狀公案を記し以て大方の同感者に告く

山名宗全墓

本墓は眞乘院の墓地にあり臺石の上に一つの圓石あるのみにて別に字を彫せす蓋し舊墓の石は失せし者なるへし

案するに眞乘院は宗全生存中創立する所なるを以て沒後此に葬りし者なるへし今別に傳る所なし聞く舊來は今の金地院東照宮の邊りに在りしを金地院を改築し其舊制を廣大にするの際茲に移す蓋し此墓も移せし者なるへし

細川幽齋夫妻之墓

天授菴墓地の內別に山涯に墓域を闢く西面相並ひ小五輪塔を立て其上に小堂を建て前に點香拜所を設く

案するに幽齋卽ち細川藤孝にして玄旨法印なり其事蹟は歷史に明かなるを以て之を略す幽齋慶長十五年八月廿日薨す壽七十七遺命して此に葬る其室光壽院も亡後同く茲に葬り之を細川氏の菩提寺となせり

堀杏菴墓

歸雲院に在り圭狀の石面に杏菴正意墓と刻するのみ此寺は堀氏歷世の兆域なるを以て南湖景山の墓も亦此傍に在り

梁川星巖及其妻紅蘭墓

天授菴に在り二墓相並ひ共に自然石上碑石を建て唯た姓名を鐫するのみ

横井沼山墓

仝所に在り石面に沼山橫井先生之墓と刻す沼山卽ち平四郎時存なり明治二年正月五日寺町に於て暗殺せらる其遺骸を茲に葬る

當山所藏寶物

○印は宸翰部に仝文を揭く□印は揷畵部に其實相を寫す

○龜山天皇御起願文橫披　壹卷
一後陽成天皇勅額　龍淵室號　壹幅
一後陽成天皇宸翰　橫軸　壹幅
○後柏原天皇勅讚　開山國師肖像壹幅　○
一後醍醐天皇綸旨　橫披　四幅　○
○後小松天皇勅宣　橫披　壹卷
一後字多天皇院宣　橫軸　壹卷
一後二條天皇院宣　橫披　壹卷
一後伏見天皇院宣　橫軸　壹幅
一後圓融天皇綸旨　橫軸　壹幅
一花園天皇院宣　橫軸　壹幅
一清涼殿拜領由緒　日野大納言筆壹卷
一清涼殿拜領由緒　本光國師筆　五幅
一康富記　當山草創由緒勅修寺大納言筆　壹幅
一足利尊氏教書　橫軸　壹幅
一等持院公文　橫軸　壹幅
一慈照院公文　橫軸　貳幅
一綸旨幷諸公文　橫披　六卷
一當寺離宮圖　橫軸　壹幅
一天下南禪寺記　諸大有撰　壹卷
一龜山天皇外記　虎關國師撰　壹卷
一持明院臨幸記　夢窓國師筆　壹卷
一古賦　愼獨齋宗眞書壹卷
一南禪寺舊記略　竺隱和尙篇　壹卷
一南禪寺諸誌　古記錄　壹卷
一古制札　木製　壹枚
一徑山志　支那版　六册
一鹿苑蔭涼日記　蔭涼記錄　卅五卷
一紺紙金泥法華經　朝鮮人筆　壹部
一紺紙銀泥華嚴經　朝鮮人筆　壹部
一史徵墨寶　折本　貳集

第二類　佛畫及畫像

一大涅槃像　唐畫　壹幅
一小涅槃像　張思恭筆　壹幅
一釋迦文殊普賢　張思恭筆　壹幅
一十六善神　張思恭筆　壹幅
一釋迦文殊普賢　兆殿司筆　三幅
一十六羅漢　唐畫　十六幅
一十六羅漢　足利義持筆　壹幅
一楊柳觀音　吳道子筆　壹幅
一楊柳觀音　牧溪筆　壹幅
一楊柳觀音　狩野安信筆　壹幅
一楊柳觀音　原在照筆　壹幅
一羅漢　西金居士筆　壹幅
一出山釋迦　遂翁筆　壹幅
一不動明王兩脇士　龍湫筆　三幅
一聖僧文殊　雲溪筆　壹幅
一文殊　畫顏卿贊南院國師　壹幅
一蘆葉達磨　畫李龍眠贊清拙　壹幅
□半身達磨　啓書記筆　壹幅

一半身達磨　狩野探幽筆　壹幅
一龜山天皇尊影　狩野探幽筆　壹幅
一後醍醐天皇尊影　筆者不詳　壹幅
一開山國師肖像　（諡宅磨榮賀　贊平田和尚）　壹幅
一南院國師肖像　贊絕海和尚　壹幅
一本光國師肖像　狩野常信筆　壹幅
一雲門禪師肖像　維那寮傳來　壹幅
一虎丘禪師肖像　維那寮傳來　壹幅
一黃龍禪師肖像　維那寮傳來　壹幅
一布袋和尚畵　贊平田和尚　壹幅

第三類　古書畵

一徑山退耕和尚墨蹟橫軸　壹幅
一夢窓國師墨蹟　橫軸　壹幅
一普明國師墨蹟　橫軸　壹幅
一龜山天皇尊影　文室筆　壹幅
一開山國師肖像　狩野探幽筆　壹幅
一開山國師肖像　文室筆　壹幅
一南院國師肖像　狩野探幽筆　壹幅
一百丈禪師肖像　維那寮傳來　壹幅
一臨濟禪師肖像　維那寮傳來　壹幅
一仰山禪師肖像　維那寮傳來　壹幅
一無準禪師肖像　維那寮傳來　壹幅
一楠正成肖像　松年筆　壹幅
一顯日國師墨蹟　橫軸　壹幅
一夢窓國師墨蹟　竪軸　双幅
一大鑑禪師墨蹟　橫軸　壹幅
口寧一山墨蹟　橫軸　壹幅
一妙素藏主墨蹟　折本　三帖
一青綠山水畵　双幅
一墨竹畵　双幅
一蘆雁畵　双幅
一荷蘆畵　双幅
一三友堂圖　壹幅
一金雞鶯圖　壹幅
一梅花書屋圖　壹幅
口睡鷗畵　壹幅
口蝦蟇鐵拐畵　双幅
一墨畵山水　壹幅
一金屛風扇流　四双
一金屛風紅梅畵　半双
一二枚折步障　壹双
一無地金飾屛風　一双
一本光國師墨蹟　橫軸　壹幅
一一切經　元版　全部
一墨畵山水　子果筆　双幅
一蘆雁畵　林良筆　双幅
一琴碁書畵之圖　孫道筆　四幅
一（李朔休製）禪會圖　文室筆　双幅
一花鳥畵　林良筆　壹幅
一猿鶴圖　周子冕筆　壹幅
一李翺禪會圖　狩野永眞筆　双幅
口蝦蟇鐵拐畵　狩野探幽筆　双幅
一紅白梅畵　狩野常信筆　双幅
一金屛風扇流　（後陽成天皇拜領）　四双
一金屛風花萩畵　狩野雪信筆　半双
一步障　仲穆筆　壹双
群青地金泥畵壹双　一双

第四類　法器及裝飾品

一傳法衣　開山國師所持壹肩　一傳法衣　南院國師所持壹肩
一應夢衣　一色替念珠　龍湫和尚傳來壹肩　龍湫和尚所持壹連
一柱杖　一金毛拂子　二本　祖師傳來　二握　支那製　二握
一竹篦　壹握　一大磬　支那製　壹個　朝鮮製　壹個
一鈴　壹個　一鈸　朝鮮製　三双
一視篆印　壹顆　一古銅印　住持傳來　壹顆　後明極禪師所持
一銅大香爐　壹個　一銅鼎形大香爐　支那製　壹個
一銅龍卷大香爐　丈ヶ二尺五寸壹個　一朱塗大卓　支那製　壹脚
一朱塗櫓大卓　壹脚　一栗色塗着色大卓　支那製　壹脚
一桑大卓　壹脚　一曲輪大卓　二尺六寸　壹脚
一青磁香爐　天龍寺製　四個　一古銅獅子香爐　支那製　壹個
一銅象香爐　壹個　一堆朱丸盆　尺壹寸　六枚
一黒曲輪葛籠箱　拜領物　壹組　一堆朱曲輪料紙硯箱拜領物　壹組

一堆朱壯丹模樣大香合〔古鎌倉製〕壹個　一堆朱大香合　支那製　壹組
一堆朱曲輪大香合　古鎌倉製　壹個　一堆朱中香合　鎌倉製　壹個
一堆朱天目臺　壹個　一漢瓦大硯　横三尺堅七寸五分　壹個
□後醍醐天皇恩賜與　壹具　一黒檀椅子　印度製　壹脚

第五類　子院所藏寶物雜組

一龜山天皇宸翰　横披　壹卷　一東照宮手蹟　色紙　壹幅
一龜山天皇宸翰　色紙　壹幅　一東照宮額　尊純親王筆　壹幅
一後光嚴天皇宸翰　色紙　壹幅　一台德院殿手蹟　色紙　壹幅
一後西院天皇宸翰　色紙　壹幅　一大猷院殿手蹟　色紙　壹幅
○後水尾天皇宸翰　本光國師徽號詔勅　壹幅　一桂昌院殿手蹟　色紙　壹幅
一雪巖欽禪師墨蹟　壹幅　一林道春之狀　横軸　壹幅
一清拙和尚墨蹟　横軸　壹幅　一社會式　横披　壹卷
一本光國師墨蹟　四幅　一行幸作記　横披　壹卷
一本光國師墨蹟　自詠自筆　壹卷　一御成獻立　横披　壹卷

一本光國師系譜　壹卷
一本光國師辭世偈　横軸　壹幅
一小堀遠州手書　横軸　壹幅
一荅遠州書　本光國師　壹幅
一板倉伊賀守手書　横軸　壹幅
一藤堂高虎書　横軸　壹幅
一金泥觀音　宅磨法眼筆　壹幅
一觀音畫像　金岡筆　壹幅
一達磨畫像　玉間筆　壹幅
一達磨畫像　然可翁筆　壹幅
□水樓閣圖　元信筆　壹幅
一持經文殊像　兆殿司筆　壹幅
一羅漢　禪月大師筆　二幅
□淡彩畫山水　徽宗皇帝筆　二幅
一墨畫山水　呂紀自畫自賛二幅
一賢人遊樂圖　君山筆　壹幅
一山門慶賛　横披　壹卷
一十六將畫像　筆者不詳　壹幅
一本光國師畫像　探幽筆　壹幅
一三十祖畫像　雲谷等顔筆　三拾幅
一達磨畫像　綱吉筆　壹幅
一觀音畫像　閻立本筆　壹幅
一墨畫山水　高然暉筆　二幅
一淡彩山水　鐘欽禮筆　二幅
□墨畫山水　兆殿司筆　壹幅
一墨竹圖　吳仲圭筆　壹卷
一山王祭圖屏風　土佐光起筆　壹双
一傳法衣　本光國師所持二肩
一東照宮御刀　本光國師拜領壹振
一金剛王竹笠　本光國師所持壹個
一青磁花入　經箇形　壹個
一井戸茶碗　藤堂高虎寄贈壹個
一雞香爐　古銅製　壹個
一元和年中諸法度條目（本光國師著）壹冊
一禁中並公家法度　本光國師著　壹冊
一武系居請　本光國師著　壹冊
一異國日記　本光國師著　壹冊
一異國日記御記錄雜記（本光國師著）壹冊
一異國渡海異國近事　本光國師著　壹冊
一本光國師日記　拾三冊
一本光國師日記　拾七冊

一本光國師日記　一無準國師肖像　壹幅
一開山大明國師　自賛肖像　壹幅　一細川幽齋公肖像　壹幅
一聖一國師肖像　壹幅　一聖一國師墨蹟　壹幅
一細川家祖先肖像　壹幅　□楊柳觀音　夔阿彌筆　壹幅
一大聖國師墨蹟　壹幅　一白鷹畵　徽宗皇帝筆　壹幅
一花鳥圖　二幅　一布袋　松花堂筆　壹幅
一草堂金碧潭圖　二幅　明畵　一開山大明國師傳法衣　壹領
一花鳥屛風　壹双　松花堂并立圖和尙賛　一子昂法華經　八卷
一印金傳法衣　壹領　平田和尙　一唐金獅子香爐　壹個
一能作生舍利　壹厨　參無畏三藏修造　一青磁香爐　壹個
○後陽成天皇宸畫南院國師肖像　壹幅　一豐于左右山水　探幽筆　三幅
一後陽成天皇勅筆　賜梅心和尙　壹幅　一面壁達磨　永德筆　壹幅
一大鑑禪師自賛肖像　壹幅　一釋迦文殊普賢畵　兆殿司筆　壹幅
一觀音像　惠心僧都筆　壹幅　一蘆雁圖　林良筆　壹幅

一寒山拾得圖　法橋宗達筆　貳幅　□印金傳法衣　大鑑禪師所持　壹領

已上は當山所藏の寶物什器にして悉く　王室將家及び歷世大祖の寄附物に非るはなし故に皆數百年の星霜を經古色粲然着目すへき者殊に多し就中　宸翰及び古文書類の如きは特に史料に供すへくして國家に益ある者あり畵圖及器物に至ては美術工藝の參攷を資すへき者亦最も多し因て近年宮內文部內務三省の檢閱及び臨時寶物取調委員の鑑定に依り鑑査狀を得て名品に位する者半を過く其尤も優なる者に至ては皆已に四百年已上の者にして唯惜むらくは年代の久により彩色自ら剝落し滿幅多く鮮明を缺く恰も紗を隔て錦を見るか如く故に寫眞術を施すに由しなし今僅に其鮮明にして且つ此寺に由緒ある者十數種を抜き寫眞彫刻版とし以て其實相の一斑を展示す

其一勅讃開山國師肖像　絹本着色竪軸竪五尺九寸横二尺七寸五分

當山開山大明國師〔略傳揭宸翰部〕の肖像にして　龜山天皇勅讃を賜り篤く當山に藏せしに應仁の兵燹に失す文龜元年法孫某當山所藏宅磨榮賀書く所の肖像に依り更に之を製し　後柏原天皇に奏請して先皇の御讃を宸書し賜ふの榮を辱

ふし以て更に舊態を模造せし所の者也當山之れを二天皇御合製の肖像と稱し特に之を敬藏す

其二水樓閣　狩野元信筆絹本淡彩横軸竪貳尺四寸五分横四尺四寸五分

將軍德川家康本光國師に贈る所今尚ほ金地に藏す三省檢閲を經て優等名品の鑑査狀を得又魯國皇太子京都漫遊の時大宮御所陳列品の一として賞贊を博す世評も亦喧し元信山水の大作中之を以て皇國の一品たりと云ふ

其三楊柳觀音　藝阿彌筆紙本墨畫竪參尺參寸五分横壹尺壹寸五分

細川幽齋の寄附する所今天授に藏す筆鋒更に奇巧を用ゐさるも態度眞に迫まり專門家の流涎する所なり

其四山水　畫兆殿司讚碩學之合作紙本墨畫竪參尺參寸五分横壹尺壹寸五分

傳來未た詳ならす今金地に藏す殿司は世間佛畫の妙手を以て之を稱す曾て其山水を見す故に疑ふ者無きに非すと雖も五山當時有名の碩學之に讚す以て其惑を解くに足らん近來三省の檢閲を經て之に優等の鑑査狀を與ふ以て證すへし今之を撮影するに當り施術の便を以て上段讚辭の幾分を省く其序は畫と倶に撮影中にありと雖今句讀に便せん爲め更に妄に揭け施すに訓點を以てす讚辭も亦然り

溪陰小築詩畫序

詠梅藥於炎天者、簡齋之神妙也、畫芭蕉於雪裡者、摩詰之天機也、皆得之於心而相忘於物也、龍峰純子璞、身立禪林稠廣之際、而溪陰其名以居之、所謂門市而心水者歟、豈不亦謂得之於心者乎、其知心之友、圖溪山之佳處而裝潢且倡於諸公、以詩其側、將贈焉、袖卷來求余措一辭、披而覽之、乃山影參差、水光瀲灩、躍游魚乎木末、迎歸鳥乎波間、以洗可塵之心、以露可畏之暑、彼唐逸竹隱桑人桃源、何楚越於肝膽乎、唯虞虢之唇齒耳、蓋是得於心而非境於外焉、然則斯圖之作也、心之畫歟、千載之下、足以觀主人之清心、諸公之神妙、畫史之天機矣、獨竹隱桃源云乎哉、雪蕉炎梅云乎哉、

應永癸巳夏河東眞玄序

其讚曰

小築溪陰地、誰人畫作圖、欄前流幾曲、屋後樹千株、萬國太平日、百年安樂軀、雲山赴清賞、此外更何須、

全愚道人周崇

水面無風碧蘸甃、山容倒玉晩生靄、幽居堪羨卜佳處、不是詩人定是禪、

磊々奇峰烟霧凝。繫留雲水寄烏藤。泥牛入海無消息。一把茆茨圍碧層。

散人梵芳

青嶂層々俯碧溪。何人避世結幽栖。荊公草舍鐘山半。杜老柴門錦水西。巖樹帶春圍砌暗。峽雲含雨護窓低。閑情猶怯薜蘿淺。宿鳥時於深處啼。

勢陽性智

老樹成林護寂寥。想應溪友乏相招。春來暴漲流將去。不見門前獨木橋。

羅云山人原沖

誰氏蹔休巳息心。茅齋僻在小稜陰。含雲樹色分濃淡。繞澗泉流作淺深。橋斷定知稀客至。巖高那復許僧尋。只應采藥林間去。窓戸無人對碧岑。

合又連

三周道人周奇

其五鶴襖　狩野元信筆紙本金泥着色竪六尺横九尺

大方丈七間の内三間襖及ひ戸障の裏張大小五十餘枚は皆な元信の筆に成る好古家の稱揚は特に本襖の畵を以て最とす今や古色磨剝寫眞に適せす大に鮮明を缺くと雖とも元信大作の一斑を管見するに足るへし

其六虎襖　狩野探幽筆紙本金箔地着色竪六尺横九尺

小方丈三間の障壁及ひ襖の張付大小五十四枚中水呑虎襖を以て世間之を艶賞喧傳す今之を撮影し以て眞物を見るの感あらしめん

其七殿上美人襖　狩野永德筆紙本金箔地着色竪六尺横九尺

大方丈七間の内三間襖及ひ戸障の裏張大小五十四枚は皆な永德の筆に成る就中好古家の稱揚は鳴瀧之圖は床壁の張付にして撮影するに由しなし今其墨痕鮮明なる者を取て以て撮影すと雖も皆三百年以上の物繪具の設色自ら剝落して鮮明なる能はす觀る者之を諒せよ

其八半身達磨　啓書記筆紙本墨畵竪軸竪三尺壹寸横壹尺五寸五分

當山三百廿二世可庭の寄附する所古人此畵を評して曰く斯眼力に非れは梁武を說得すること能はさるへし又此筆勢は啓書記の得色とする所後世達磨を畵く者宜く之を以て鑑となすへしとなり

其九寧一山墨蹟　紙本竪壹尺横壹尺九寸五分

寧一山の略傳は宸翰部中巳に之を出す今本書に付て拙か其引を記さんに寧一山

初め鎌倉瑞鹿山圓覺寺に住す後ち龜山天皇の勅命を以て當山に轉住す本書は一山鎌倉に在るの日當山開山大明國師無關大和尚の十三回忌の辰に値ふ其供養の偈たること本文に明なり又本文の冠首に前東福とあるは頗る不審しきに似たれとも決して疑ふへきに非す當山開山無關和尚は龜山天皇離宮を賜ふと雖と自己の不德を愼み辭して東福に歸住す當山勅創前已に遷化す故に十三回忌の頃東福の法階を以て之を稱す故に然るなり後ち國師號を諡賜し給ふに及て始て南禪開山の號を以す本書は元鎌倉圓覺寺の所藏たりしならん今當山に藏す其文の讀み易すからんことを欲し更に全文を寫し加るに訓點を以てす

前東福無關和尚十三年忌旦小師等於圓覺設供請拈香云此香凌霄峰頂根苗南屏山中秀茂一枝分到扶桑高價喧傳衆口某人得處眞純用時奇妙薰日峰十二載氣焰輝騰東海上二六十州芳馨遍透至今枝葉滿叢林清陰彌宇宙雖有拖息十三年提起香云畢竟這箇元不朽茲臨諱旦小師玄仁等借圓覺手拈出一要證其攘羊二要冤將恩報拈香云有鼻孔底衲僧一任東嗚西嗅

嘉元癸卯臘月

瑞鹿峰一山一寧

其十蝦蟇鐵拐雙幅　探幽筆絹本淡彩竪各四尺横各二尺三寸五分

承應三年甲午七月十二日探幽安信兩大家相約し當方丈に於て畫く所安信の畫は中觀音左右猿鶴探幽の畫は中達磨左右は卽ち本幅なり今其中幅を省く

其十一鵺圖　萬國頑筆絹本墨畫竪三尺二寸横壹尺三寸五分

傳來未た詳ならすと雖とも其筆勢閑雅にして寫生眞に迫り好古家の稱賛する所當山所藏中名畫の一なり

其十二後醍醐天皇恩賜與　奥行三尺五寸丈三尺横二尺五寸

本與の構造は亂世の餘皇室の調度甚た御質素別に巧みならすと雖とも自ら高尚にして卑下の物に非さること一見して知るへし抑も此與の由緒を尋ぬるに當山第八世大光國師に賜ふ所なり國師は法を大應國師に嗣き潛居出世の意なし　花園天皇屢々詔して之を起たしむ　後醍ひ起り禪宗を排斥す元亨四年正月廿一日　天皇延曆園城東寺南都の智德を召し清涼殿に法論せしむ國師適風疾に困臥す然れとも關する所至大なるを以て勅を奉し上足の弟子妙超侍者を率ゐて殿に上る公卿百官班を頒て傾聽す諸講師先つ

徒屬を出して強弱を驗す國師妙超侍者に命して斥指せしむ法印玄慧出て曰くの何なるか是れ教外別傳の禪侍者曰く八角磨盤空裏に走ると玄慧會せず又圜城寺の僧匠函を携て出て曰く之れは是れ乾坤の函と侍者擊碎して曰く乾坤打破如時如何と僧匠嘿然測る罔し諸講師臂を振ひ脛を切り問難蜂起す國師無礙の辨を以て一一之を挫く洪鐘の敲擊に應するが如し廿七日に至りて虎聖出て曰く問ふ如何なるか是れ禪と國師曰く箭已に弦を離る返回の勢なしと聖曰く吾宗も亦復是の如し國師扇子を擧て曰く儞試に射よ看んと聖曰く當れり國師卽ち扇子を袖にして曰く重て矢を發せよ看んと聖曰く箭既に盡きぬ國師曰く吾禪を知らんと欲せは白雲萬里聖曰く禪得て聽く可きか國師曰く近前來儞が爲めに道着せん聖近前す國師便ち一踏に踏倒す聖起き來て禮拜す是に於て諸講師旗靡き陣披て各弟子の禮を執る皇心悅懌群臣驚嘆す國師病中力めて法問に從ひ連亘七日堅坐勉苦遂に諸宗を屈服し大に禪宗の光輝を放てり然れとも之れか爲め病勢益重し　天皇特に興を賜ひ送りて寺に歸す本興是なり途上偈を說き曰く淸風匝地杲日當空。十方俱遍寒徧界沒行踪と溘焉として化す實に元亨四年正月廿七日なり

山水雙幅　宋徽宗皇帝筆絹本淡彩畵竪各四尺壹寸八分橫各壹尺八寸

傳に曰く元足利賴政の藏する所後展轉して德川家康の有に歸す家康本光國師に賜ふ今尙ほ金地に藏す三省の檢閱及ひ全國寶物取調を經て名品中優等の鑑査狀を受く當山藏幅中の最第一なり古色眇然寫眞術に適せす極めて鮮明を缺く觀者之を諒せよ

印金傳法衣　竪四尺四寸橫七尺七寸

是れ當山第十四世大鑑禪師の將來にして今尙聽松に藏す禪師は元の福州連江邑劉氏の子十五歲にして落髮諸方徧參法を愚極に嗣く嘉曆元年吾國の請に依り來朝北條高時請て建長に住せしめ又圓覺に移り元弘三年　後醍醐天皇龍馭徙に回る禪師に詔して建仁に住せしむ居ること三年一日　天皇詔して內裏に入れ命して南禪に至らしむ禪師固く辭して退く尋て　天使紫封を捧けて到る始て恩命を拜す凡そ南禪に住すること前後兩回信州太守小笠原貞宗開禪寺を刱め禪師を請して開祖となす化道甚た盛大なり禪師殊に持律峻嚴自ら淸規を著し之を叢林に行ひ又小笠原氏の爲めに諸禮の式法を創定したりと云ふ本法衣は卽ち禪師の遺

物にして最も之を鄭重に匣藏す其質は紫地にして恰も精良の羽二重に似たり之れに金箔を用て牡丹唐草の模様と五鈷の紋様とを押したる者にて太た優美に且つ高尚なり其製作年代は宋朝即ち七百年以上金襴織の意匠未た非さる時の物なるへしと云ふ又中に少く模様の花唐草地は紋紗様の者にして少く年代を殊にせし者ならん然れとも其古雅なること復た同一なり實に好古家の歎賞垂涎する亦宜なり依て今や其模様を表紙に寫し以て古美術の一班を天下に披露せん

南禪寺偉觀畢

勅讀開山國師肖像

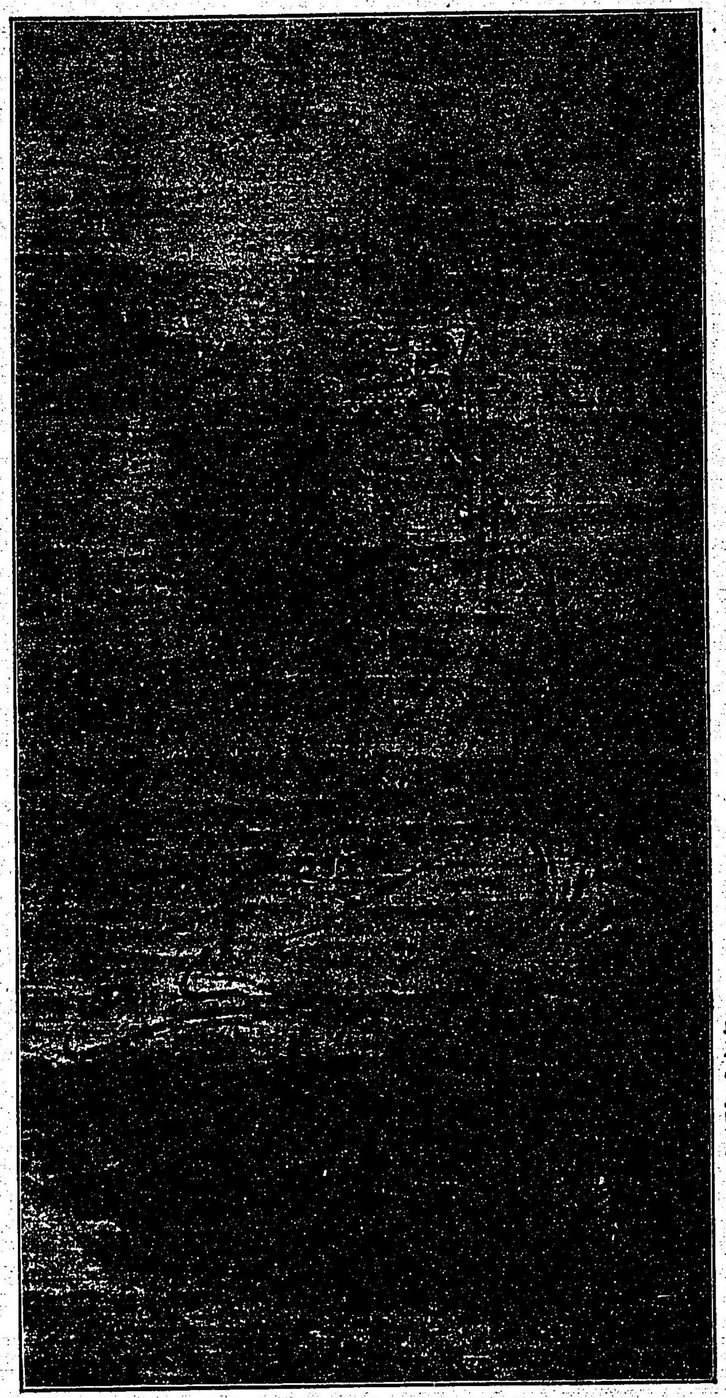
小川一眞寫真影刻銅版及印刷

物にして最も之を鄭重に匣藏す其質は紫地にして恰も精巧の羽二重に似たり之れに金箔を用て牡丹唐草の模様と五鈷の紋様とを押したる者にて太た優美に且つ高尚なり其製作年代は宋朝即ち七百年以上金襴織の意匠未た非さる時の物なるへしと云ふ又中に少く模様の花唐草地は紋紗様の者にして少く年代を殊にせし者ならん然れとも其古雅なること復た同一なり實に好古家の歎賞垂涎すへき宜なり依て今や其模様を表紙に寫し以て古美術の一班を天下に披露せん

南禪寺佛觀畢

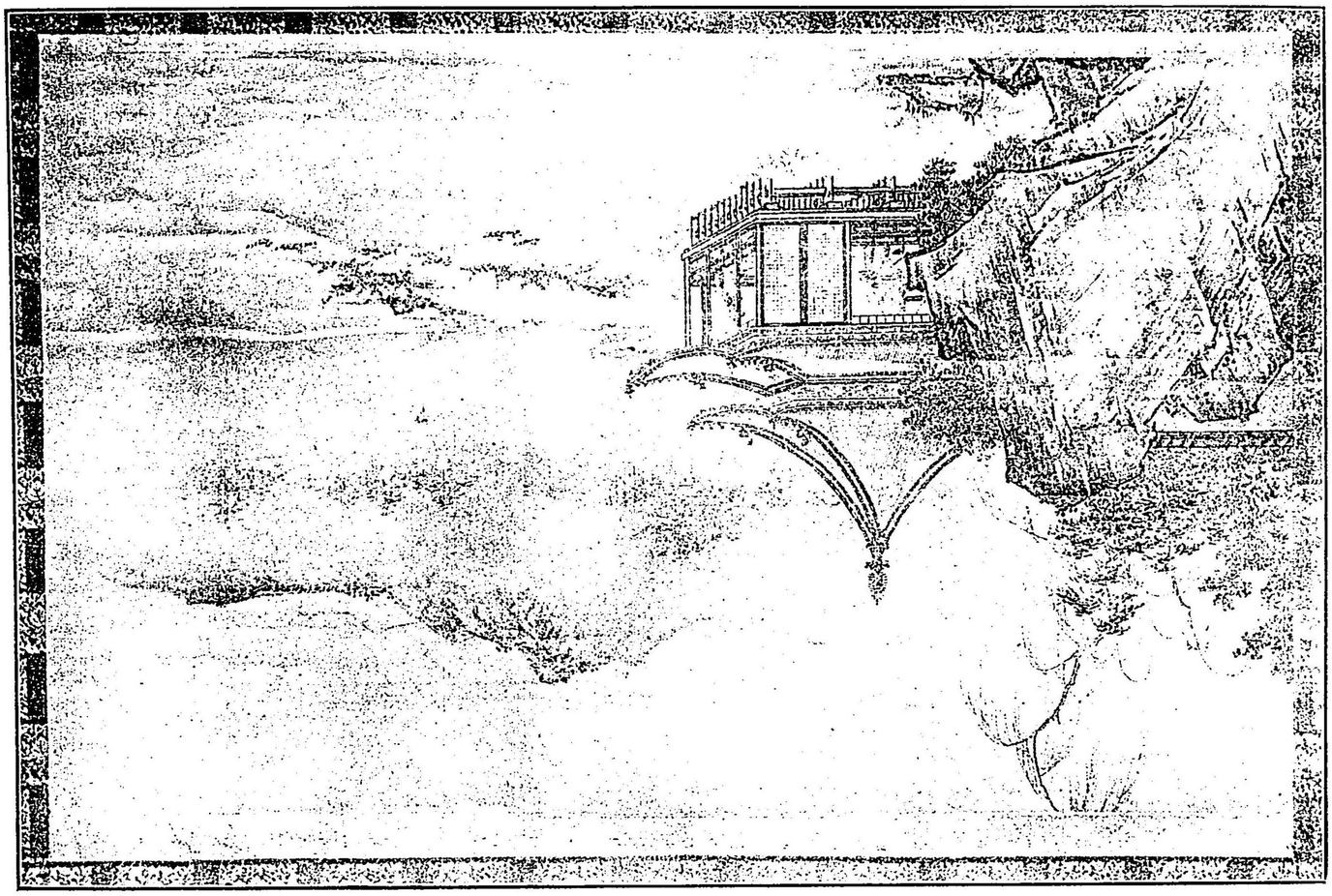
勅讀開山國師肖像

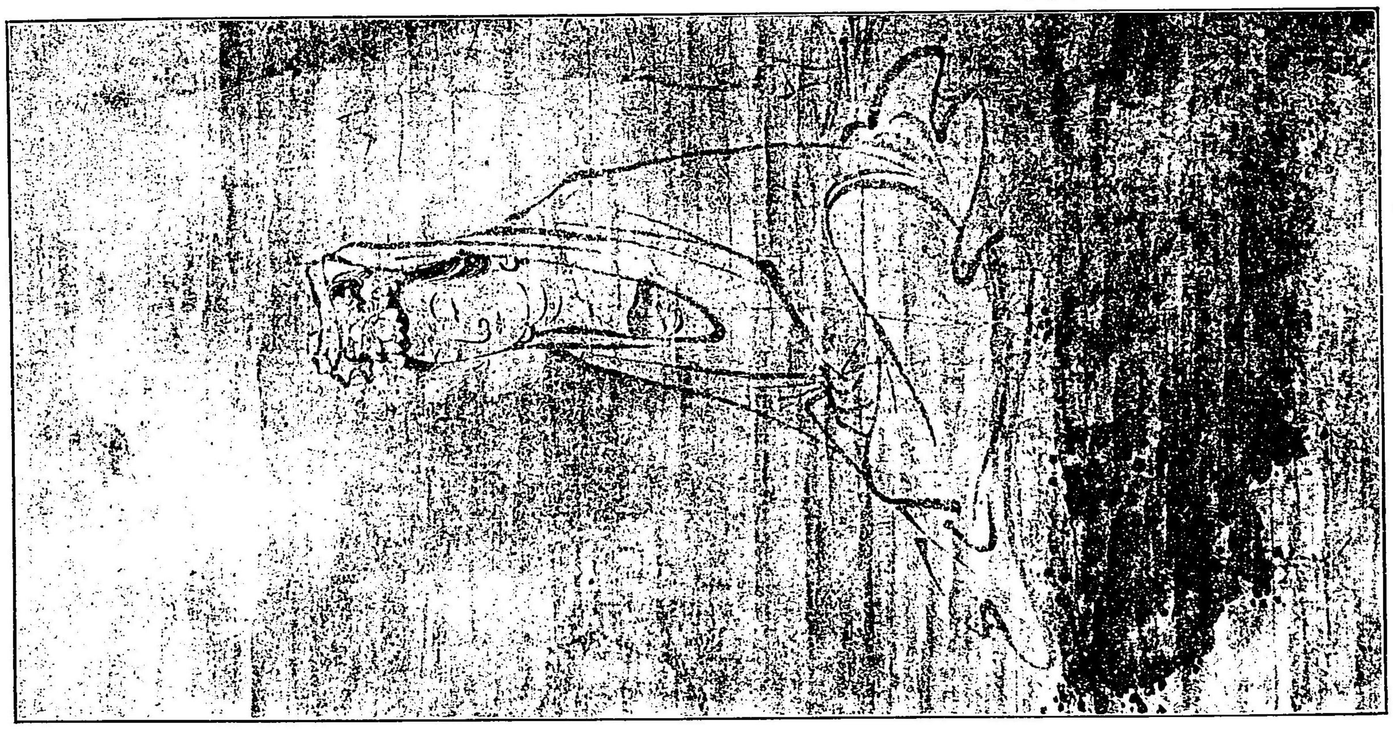
小川一真寫真彫刻銅版及印刷



楊柳觀音　藝阿彌筆

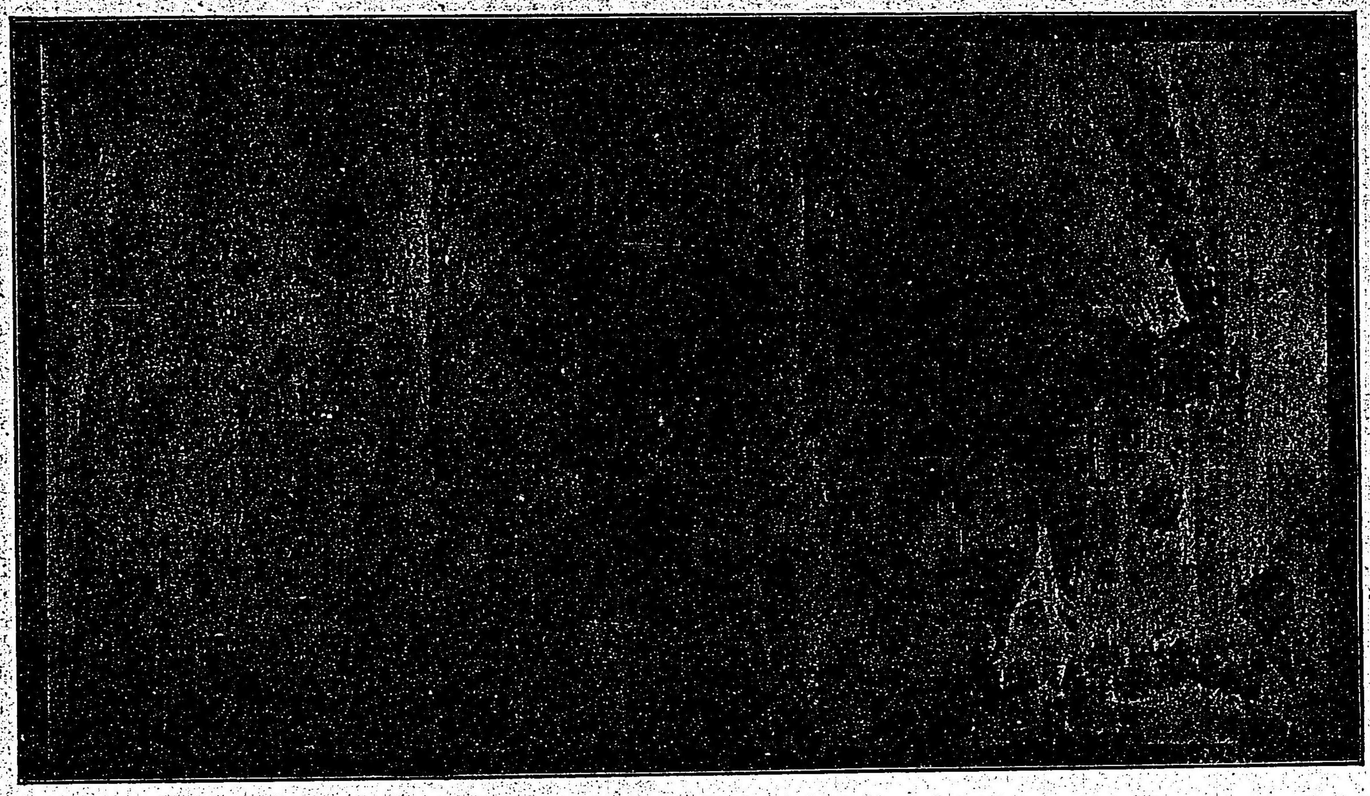
小川一眞寫真彫刻銅版及印刷





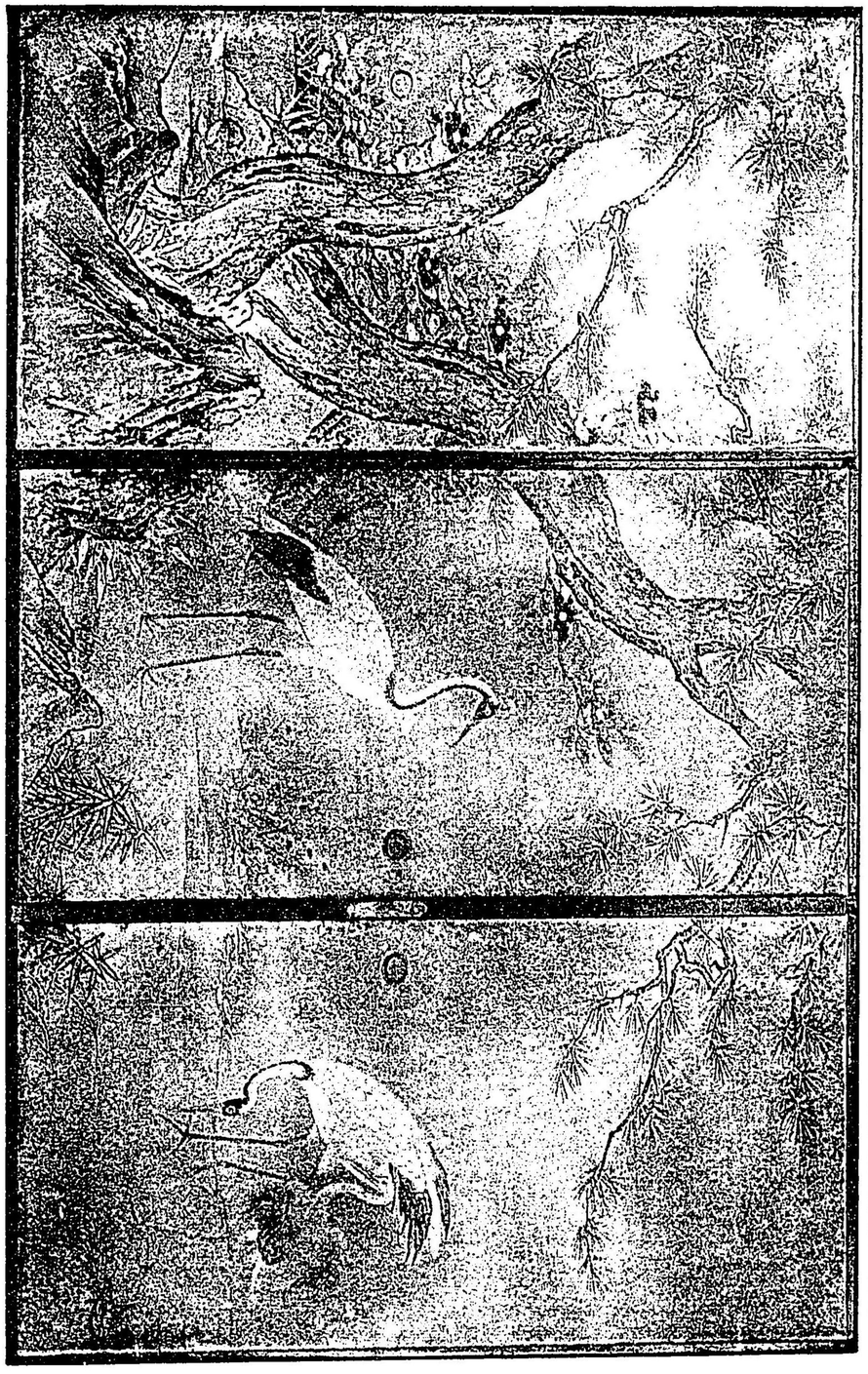
二三一 真蹟真影刻銅版又印刷

葉踊阿蒐　音拙卿孫



黃司馥兆水山

鷓鴣　　蔣堅元信葉



小川一眞寫真影刻銅版及印刷

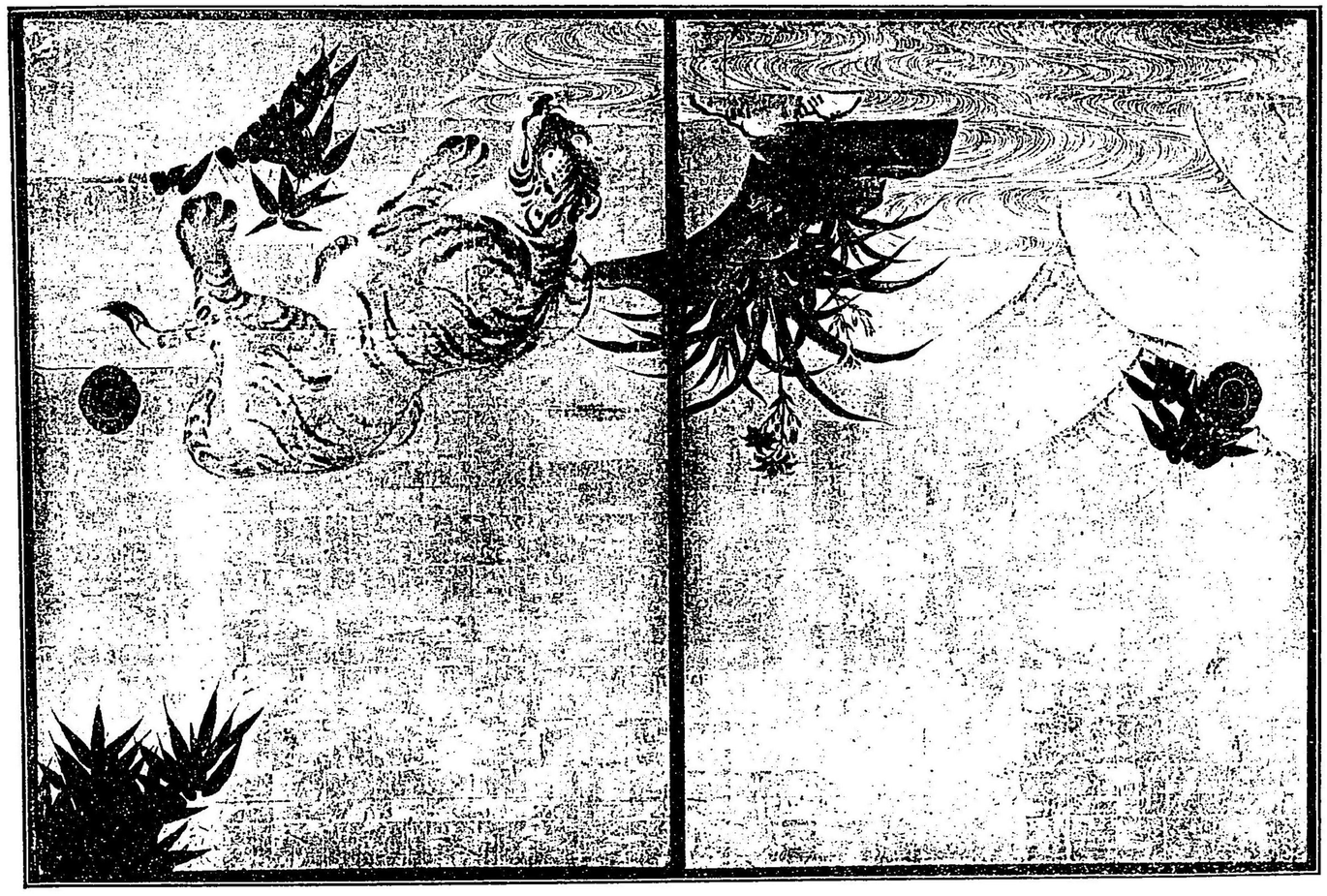
蕭信元製拓後題

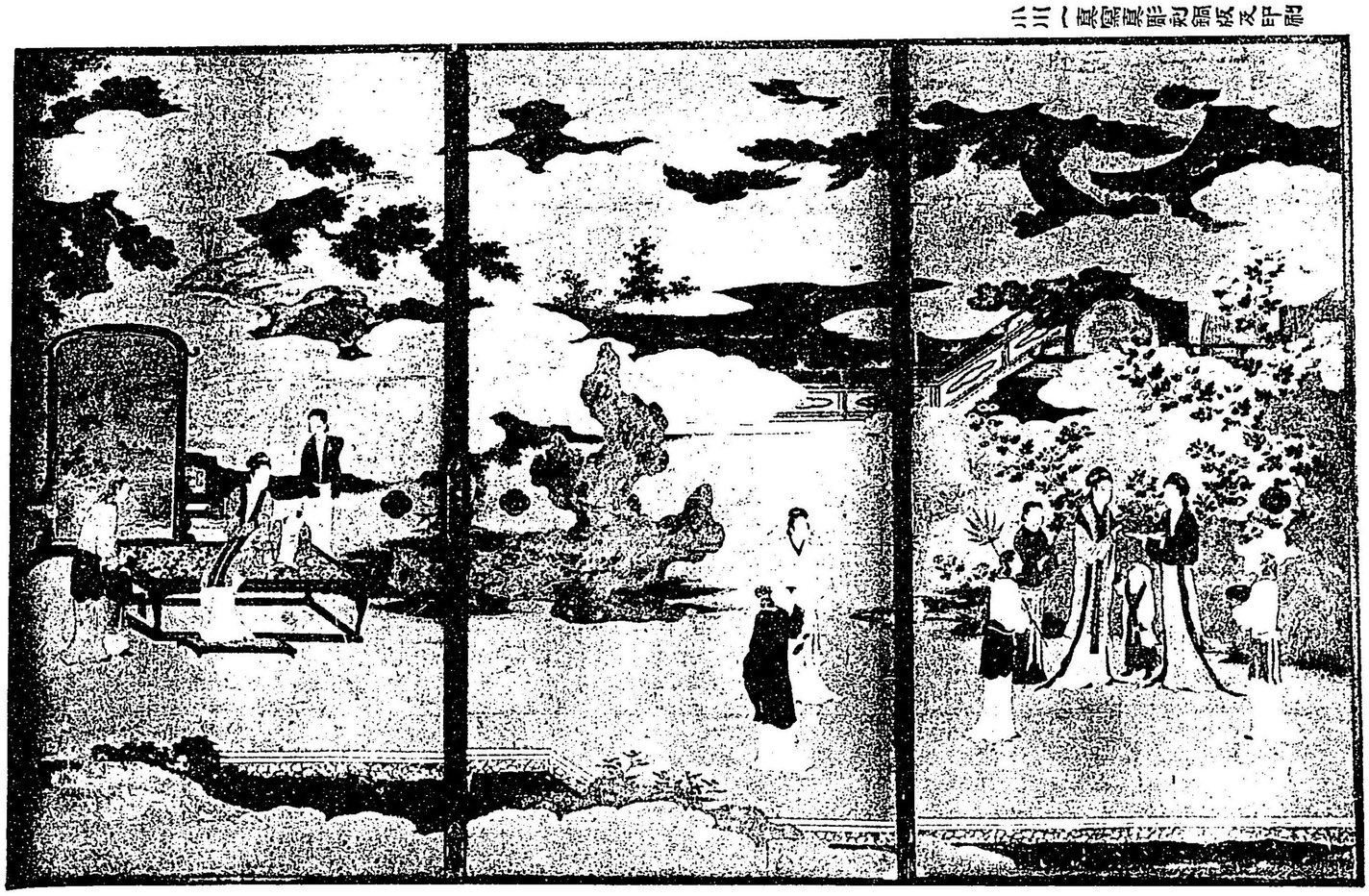
山水 兆殿司筆

瀟湘小景詩畫序

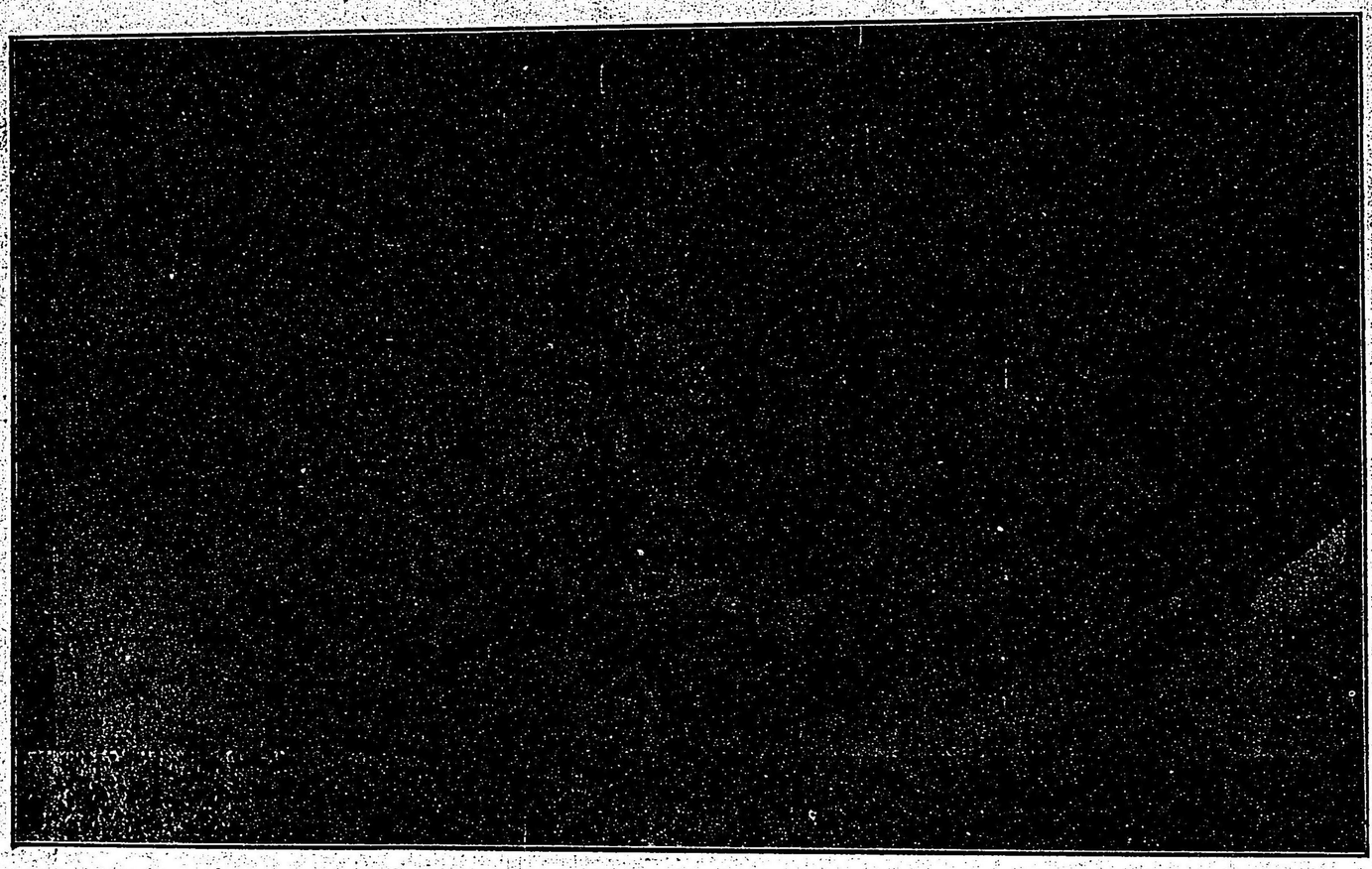
詩格落於炎天者閒齋之神妙也畫芭蕉於雪裡者摩詰之天機也皆得之於心而相忘於物也龍峰純于孩身立禪林稱海衣俗而溪陰其名以居之所謂門市而心水者歟豈不水謂得之於心者乎其知心之友圖溪山之佳處而裝潢且倡於諸公以詩兵側將贈焉而袖來求余指一醉披而覽之乃山影參差兔水光激灩群魚可木木迎岫鳥平沒間以洗可慶之心以塵可思之著彼漁逕竹陰桑人桃源何趣趣於肝膽乎雄寒神之居而盖是得於心而非境於外焉然則斯圖之作也心之畫也斯千載之下亞以觀主人之清心緒公神妙盖史之天擬矣題詩俊逸桃源云水來雪莫夫特云乎哉

澳之美人照　　葡萄牙永遠業

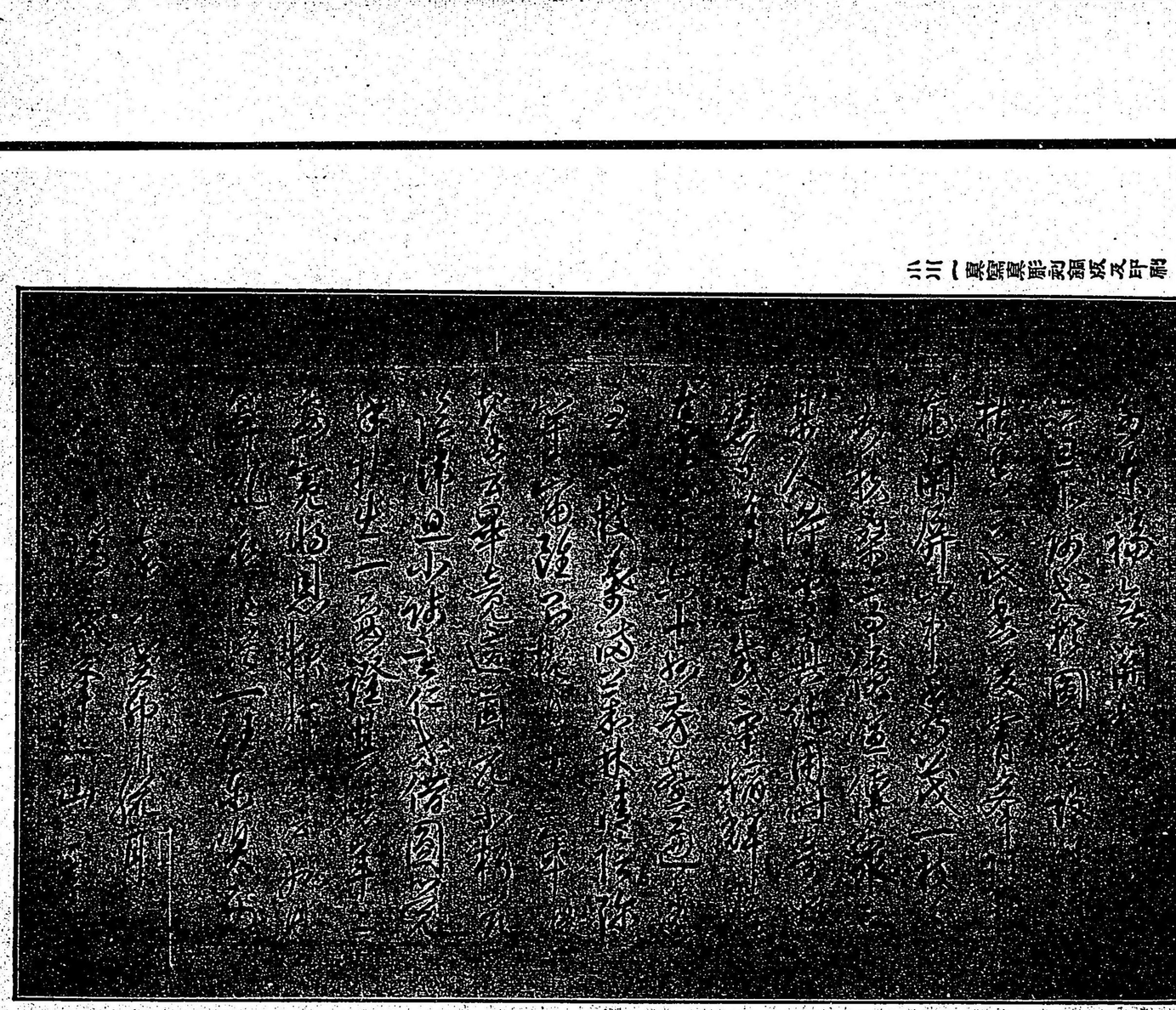




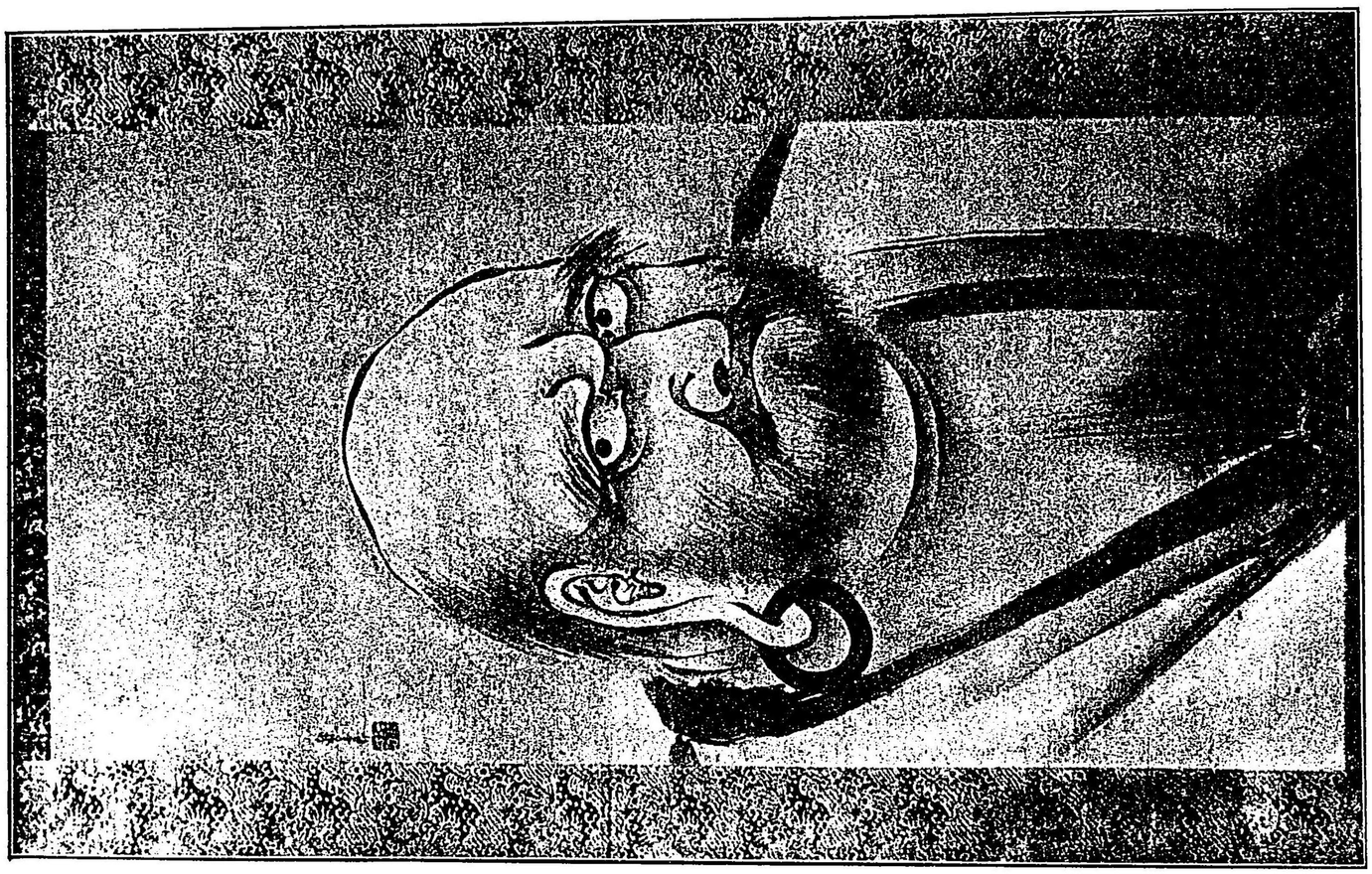
賊互美人視　　招哭永遠葉

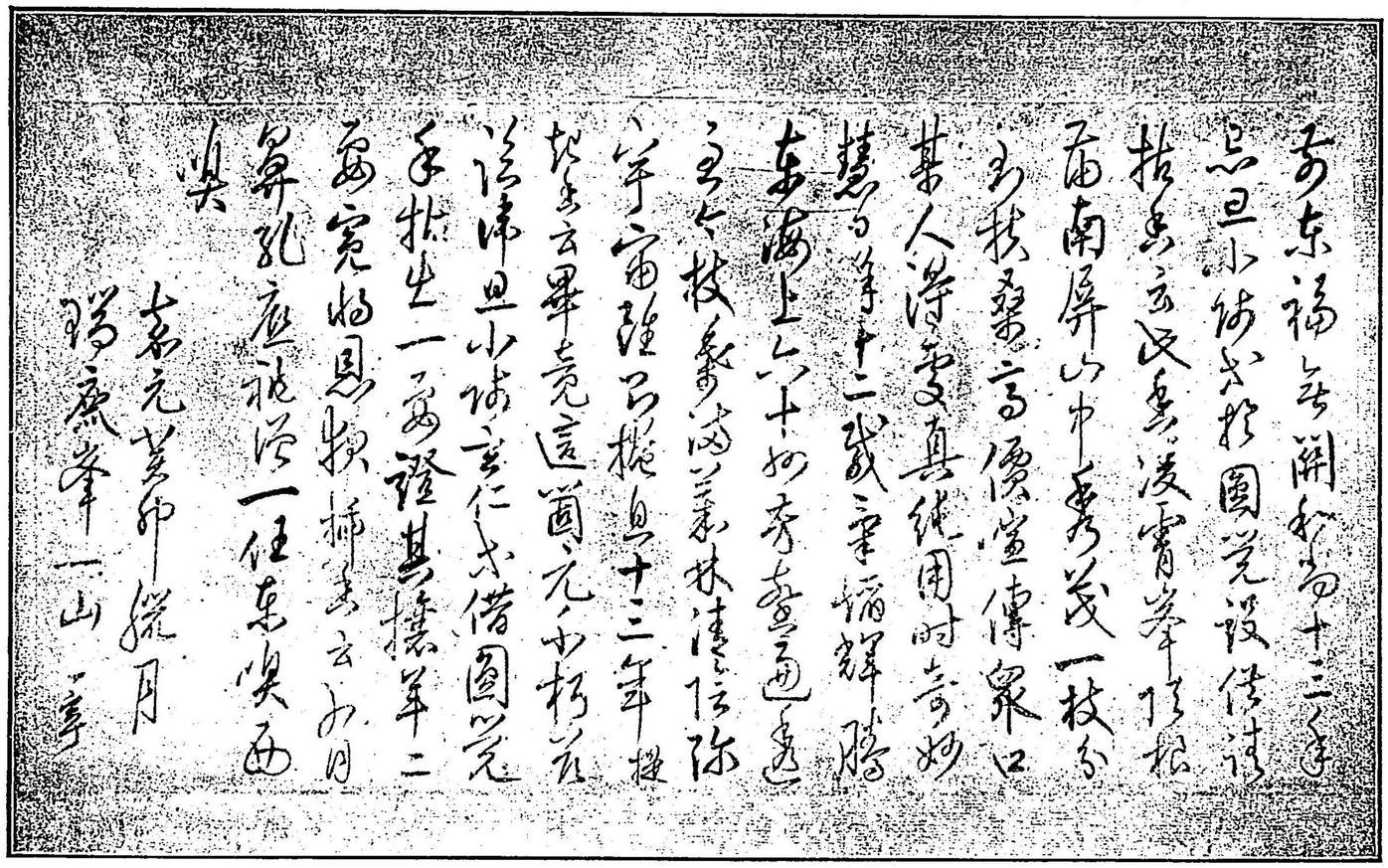


黃記書畝　原境界光

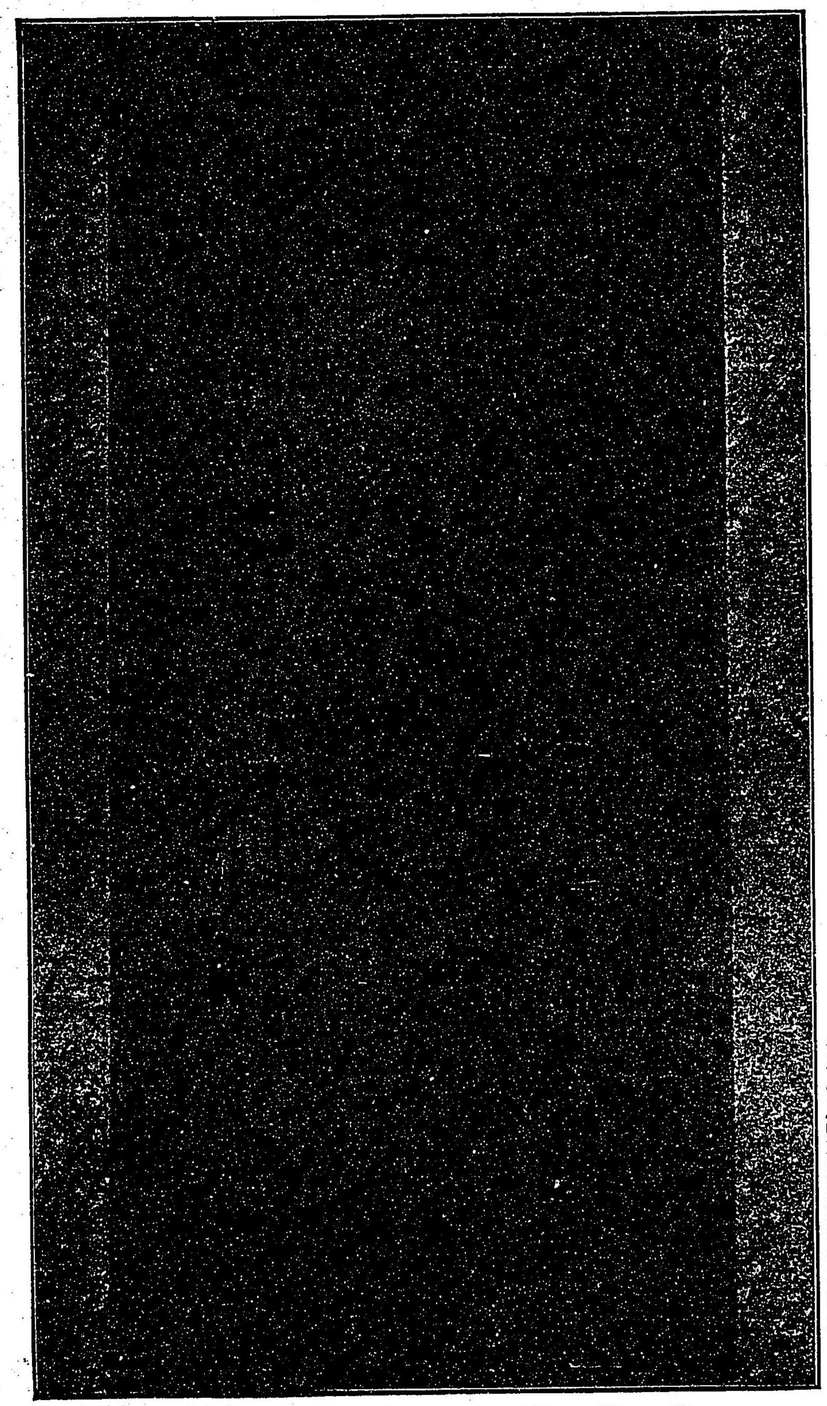


寰一山墨贖



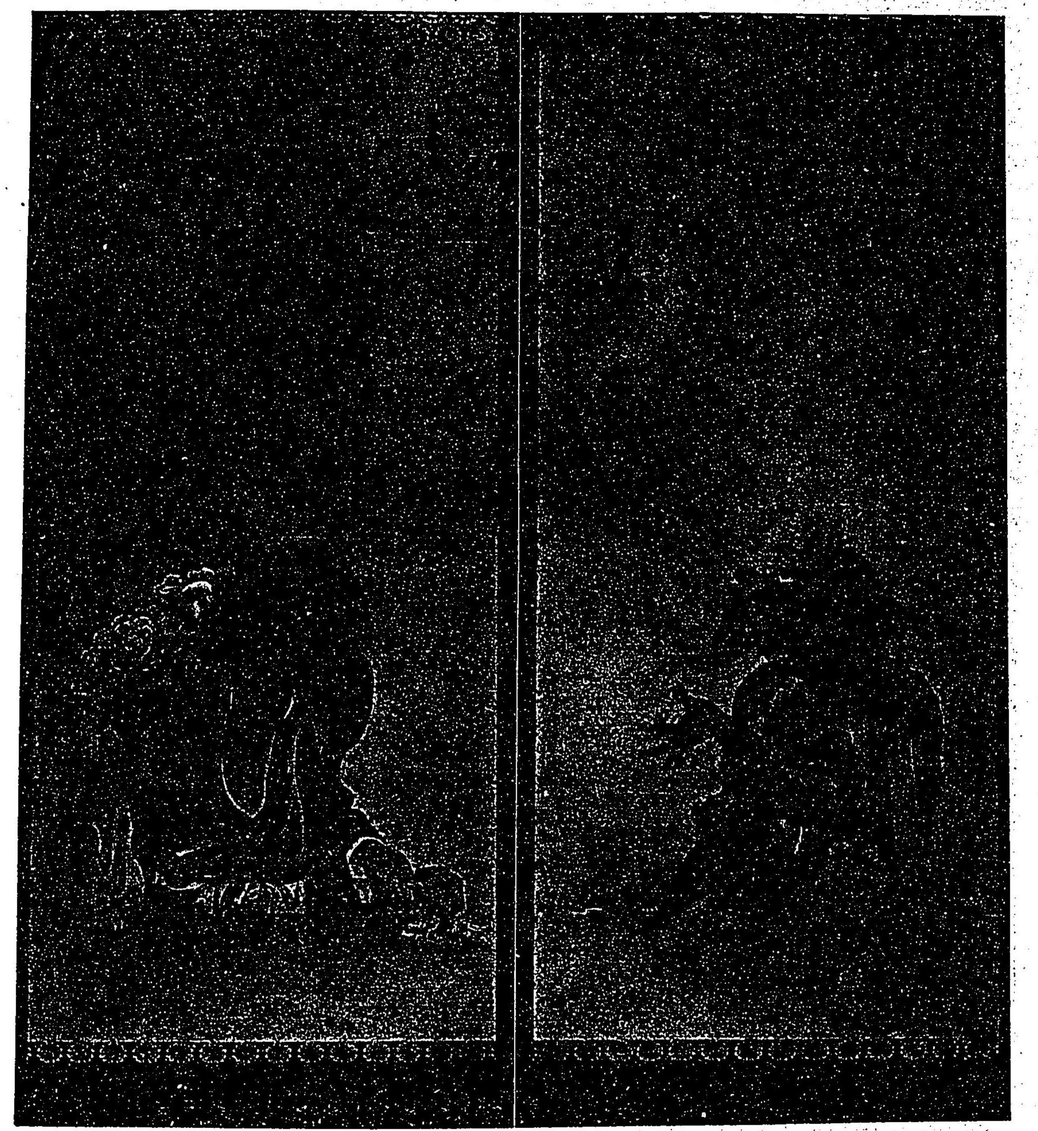


寧一山墨蹟



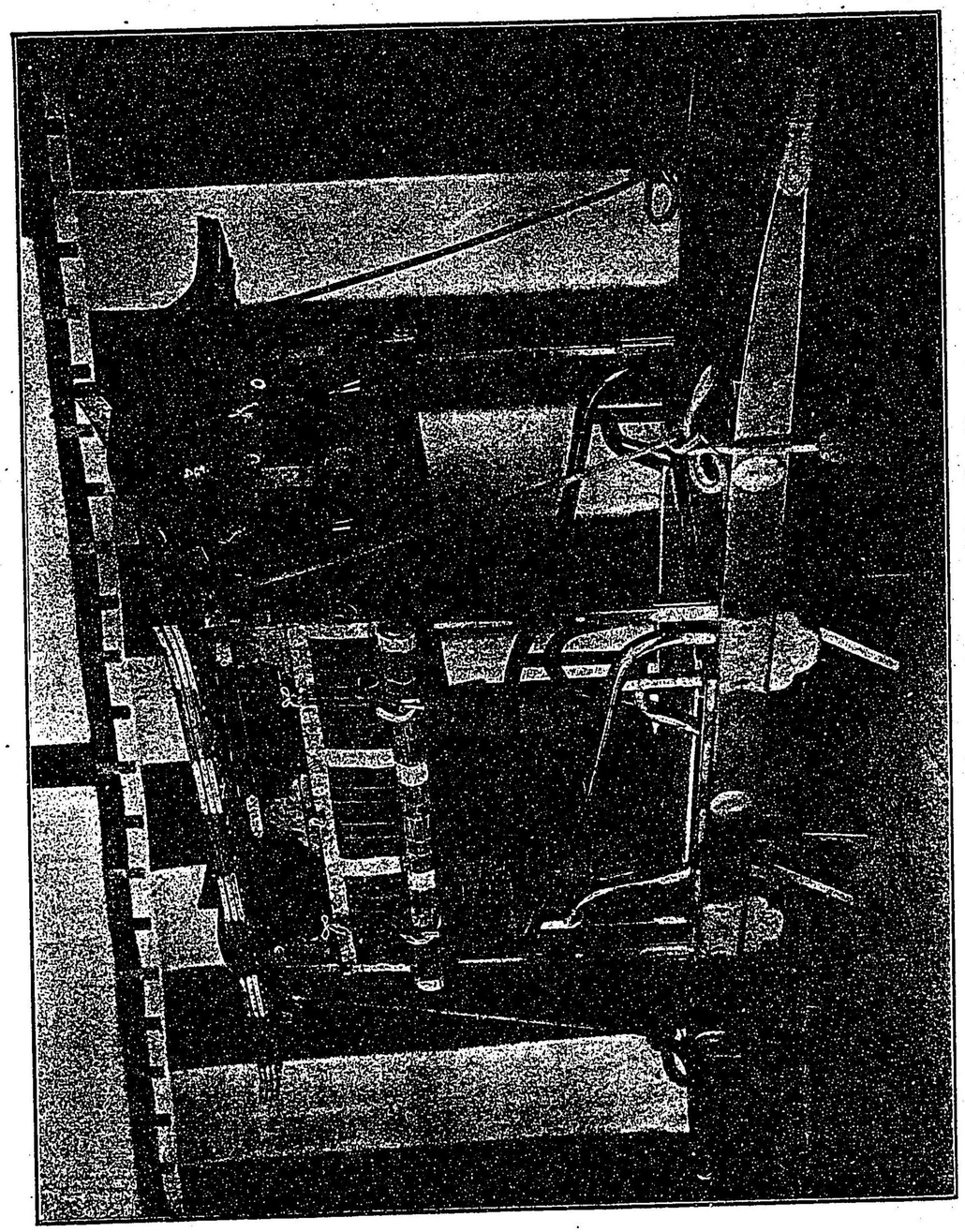
睡鴨圖　萬國繪葉

小川一眞寫眞彫刻銅版及印刷

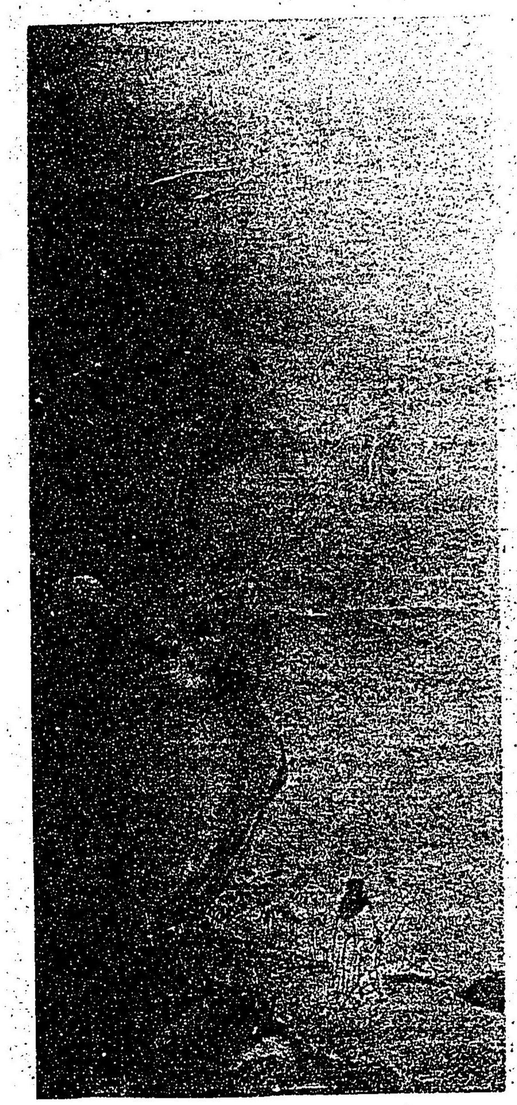


鐵蕎麥拐與幅　荷芝採蓮葉

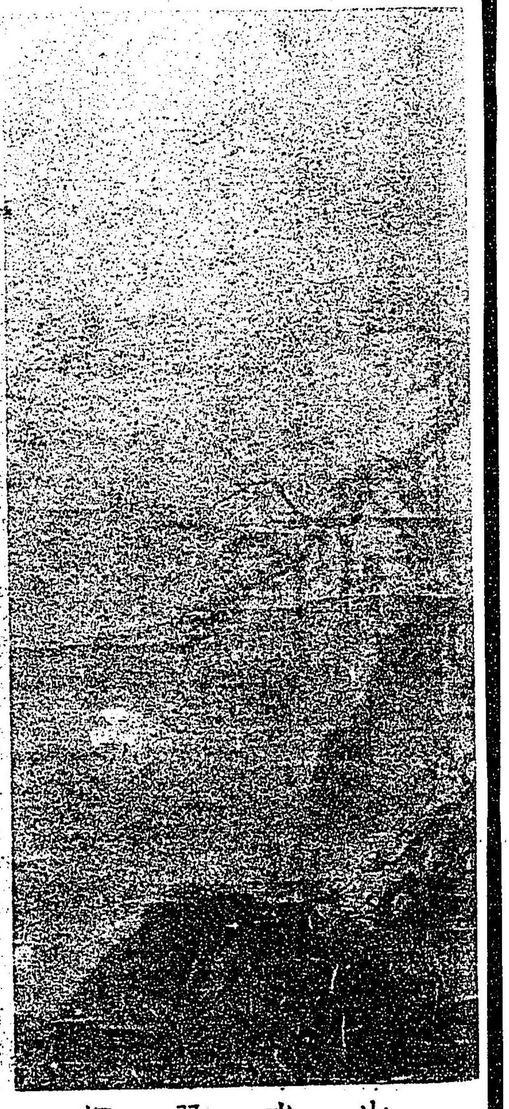
川（一集冥勘類刻頗夥千部



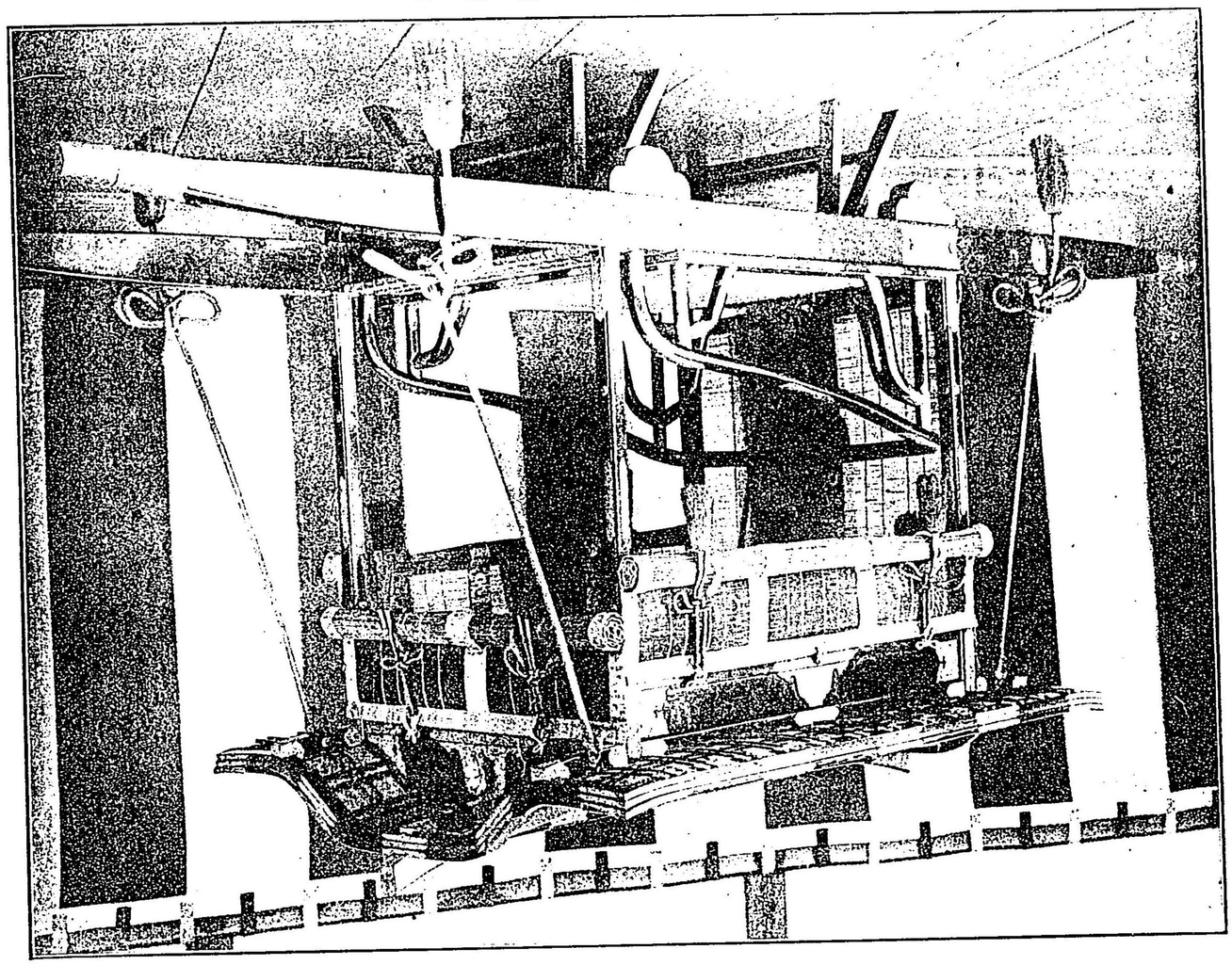
奥鵐図皇天關艇狭



宋徽宗皇帝筆



山水双幅



宋 徽 宗 趙 佶 雙 水 山 圖

110
56

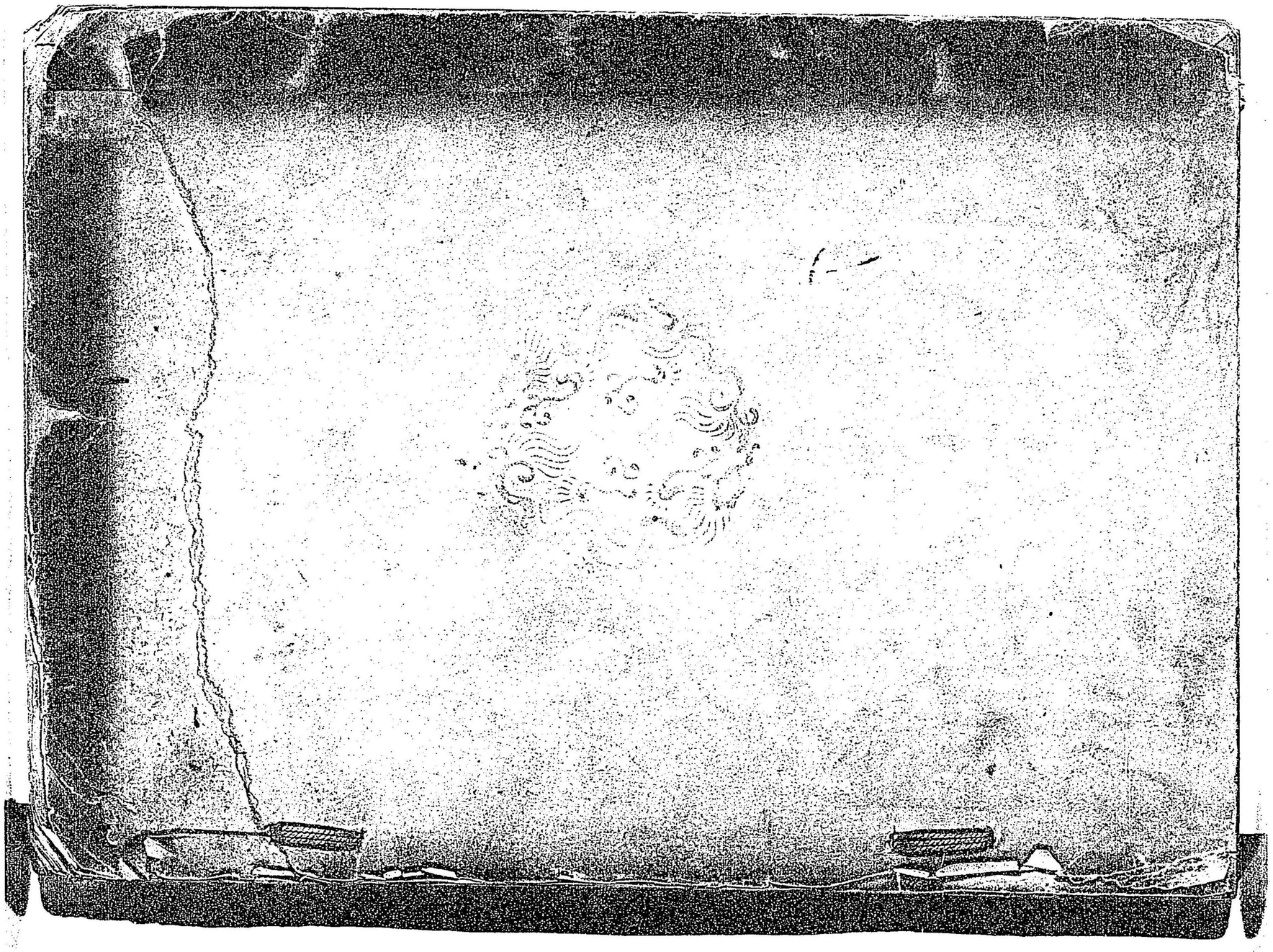
明治廿八年■十月■■日
同　年同月■■十■日

印刷
發行

非賣品

編輯兼發行者　島根縣平民　畑　道温
京都市上京區南禪寺町三拾三番戸寄留

發行所　本堂再建事務本部
京都市上京區南禪寺町三拾三番戸

印刷者　小谷義一
京都市下京區室町通綾小路下ル白柴天町三拾三番戸

印刷所　博成堂
京都市下京區室町通綾小路下ル白柴天町三拾三番戸